

2022

研究・計画・設計・ワークショップ
生涯学習施設・図書館

(株)岡田新一設計事務所

岡田新一設計事務所「図書館」を中心とする公共建築 設計監理実績リスト

	竣工年	名称	所在地	階数	面積㎡	蔵書収容力	備考(併設施設など/受賞歴/掲載雑誌など)
国立	1974	最高裁判所図書館	東京都千代田区	(2F)	2775※	開架 4万冊, 閉架 28万冊, 合計 32万冊	日本建築学会賞, 建築業協会賞(BCS)/ 新建築7508, SD7508, 建築雑誌7509
県立	1978	群馬県立図書館	群馬県前橋市	4F/B1	6,681	開架 10万冊, 閉架 60万冊, 合計 70万冊	建築業協会賞(BCS)/ 新建築7812, 建築文化7812, 日経アーキテクチャ781127
	1989	徳島県立図書館	徳島県徳島市	3F	9,000	開架 25万冊, 閉架100万冊, 合計125万冊	新建築9102, 日経アーキテクチャ910121
	1995	岐阜県図書館	岐阜県岐阜市	4F/B1	25,704	開架 20万冊, 閉架 90万冊, 合計110万冊	第15回岐阜市都市美創出賞/ 新建築9604, 公共建築9510
市区立	1973	倉敷市立児島図書館	岡山県倉敷市	2F	2,860	開架 18万冊, 閉架3.5万冊, 合計21.5万冊	
	1980	所沢市立図書館	埼玉県所沢市	3F/B1	3,481	開架 5万冊, 閉架 17万冊, 合計 22万冊	建築文化8009
	1981	郡山市立図書館	福島県郡山市	3F/B1	5,924	開架 10万冊, 閉架 15万冊, 合計 25万冊	SD8109, 建築画報8002, 建築画報8010
	1981	和歌山市民図書館	和歌山県和歌山市	4F/B1	7,290	開架 12万冊, 閉架 30万冊, 合計 42万冊	第16回SDA賞/ 新建築8204, 建築画報8002, 建築画報8010
	1983	岡山市立浦安図書館	岡山県岡山市	(1F)	870※	開架 6.5万冊 合計6.5万冊	文化体育館併設 / 建築文化8304, 日経アーキテクチャ830131
	1984	八戸市立図書館	青森県八戸市	3F	3,633	開架 15万冊, 閉架 20万冊, 合計 35万冊	新建築8703
	1986	藤沢市総合市民図書館	神奈川県藤沢市	2F/B1	4,698	開架 20万冊, 閉架 15万冊, 合計 35万冊	第4回日本図書館協会賞/ 新建築8703, 日経アーキテクチャ870209
	1986	秩父市立図書館	埼玉県秩父市	3F	3,823	開架 9万冊, 閉架 15万冊, 合計 24万冊	新建築8703
	1988	苫小牧市立中央図書館	北海道苫小牧市	2F/B1	4,419	開架 17万冊, 閉架 25万冊, 合計 42万冊	サンガーデン併設 / 新建築8904
	1993	中野区立中央図書館	東京都中野区	(B2)	4470※	開架 20万冊, 閉架 30万冊, 合計 50万冊	1200席コンサートホール併設 / 近代建築9312, SD別冊31号
	1994	金沢市立泉野図書館	石川県金沢市	3F/B2	9,410	開架 19万冊, 閉架 6万冊, 合計 25万冊	平成7年石川県建築賞, 第8回金沢都市美文化賞, 平成7年中部建築賞/ 新建築9610, 生涯学習空間9605, 建築画報9804, 学遊園NO.2
	1994	小田原市立かもめ図書館	神奈川県小田原市	3F	5,657	開架 10万冊, 閉架 7万冊, 合計 17万冊	第14回日本図書館協会建築賞/ 新建築9410, 図書館雑誌9602, 建築画報9804, 学遊園NO.2
	1995	横浜市都筑図書館	神奈川県横浜市	(1F)	2000※	開架 6万冊, 閉架 4万冊, 合計 10万冊	都筑区総合庁舎内 / 建築ジャーナル9509
	2002	我孫子市生涯学習センター	千葉県我孫子市	2F	4,365	開架 10万冊, 閉架 16万冊, 合計26万冊	中央公民館・交流機能との複合 / 新建築0208, 生涯学習空間0209, 季刊 文教施設03初春号, /明治大学図書館司書課程メディア授業収録図書館
	2005	あきる野市東部図書館エル	東京都あきる野市	2F	1,375	開架7.5万冊, 閉架1.5万冊, 合計9万冊	集会施設との複合 / 第25回日本図書館協会建築賞, JIA優秀建築選2006/ 明治大学図書館司書課程メディア授業収録図書館, JLA図書館実践シリーズ『よい図書館施設をつくる』, 近代建築0804
	2007	あきる野市中央図書館	東京都あきる野市	3F	3,478	開架14万冊, 閉架24万冊, 合計38万冊	駅前地区の活性化施設 / 明治大学図書館司書課程メディア授業収録図書館, 近代建築0804
	2007	新潟市立中央図書館	新潟県新潟市	3F	9,132	開架 35万冊, 閉架45万冊, 合計80万冊	第13回公共建築賞優秀賞, 第26回日本図書館協会建築賞, JIA優秀建築選2008 / 年報こども図書館2011, JLA図書館実践シリーズ『よい図書館施設をつくる』, 近代建築0804, 明治大学図書館司書課程メディア授業収録図書館
	2008	日進市立図書館	愛知県日進市	2F	6,102	開架18万冊, 閉架30万冊, 合計48万冊	H24年度バリアフリー・ユニバーサルデザイン内閣府特命担当大臣表彰優良賞(図書館では全国初)/ 第17回愛知県人にやさしい街づくり賞特別賞, 日本建築学会作品選集2011, JIA優秀建築選2009, JLA図書館実践シリーズ『よい図書館施設をつくる』, 近代建築0904, 『市民とつくる図書館』2021
	2015	八千代市立中央図書館・市民ギャラリー	千葉県八千代市	2F	6,269	開架17万冊, 閉架29万冊, 合計46万冊	第10回キッズデザイン賞(図書館として全国初), 第33回日本図書館協会建築賞, 第22回千葉県建築文化賞入賞 / JLA図書館情報学テキストシリーズⅢ『図書館施設論』, 近代建築1512
	2016	北茨城市立図書館	茨城県北茨城市	2F	2,500	開架11万冊, 閉架10万冊, 合計21万冊	地元・柴建築設計事務所を構成員とする設計企業体にて設計監理 / 第104回全国図書館大会シンポジウム「市民とともに成長する図書館」にて紹介 / 建築士1707, 図書館雑誌1708
	2018	気仙沼市図書館・児童センター	宮城県気仙沼市	2F	3,221	開架12.1万冊, 閉架23.9万冊, 合計36万冊	震災復興事業 / 第13回キッズデザイン賞, 第39回東北建築賞, 第53回SDA賞 / 国立国会図書館調査研究「地域の拠点形成を意図した図書館の施設と機能」全国5例の1館として紹介, JLA図書館情報学テキストシリーズⅢ『図書館施設論』, LRG NO.23猪谷千香著「図書館エスノグラフィーVOL.9」
	2023 開館予定	佐倉図書館等新町活性化複合施設	千葉県佐倉市	3F	3,700	開架9万冊, 閉架18万冊, 合計27万冊	図書館を核に子育て支援機能, 市史保存機能, 展示機能, カフェその他の複合施設, 佐倉の秋祭り会場 /
	(基本計画) 2017	板橋区立中央図書館	東京都板橋区	4F/B1	5,280	開架22万冊, 閉架28万冊, 合計50万冊	平和公園に立地。「いたばしポロニー子ども絵本館」を統合
	(基本設計) 1998	会津若松市中央図書館	福島県会津若松市	2F	3,400	開架 13万冊, 閉架 27万冊, 合計 40万冊	中央公民館・科学体験機能・斎藤清記念館併設
町立	1990	幕別町立図書館	北海道幕別町	1F	1,365	開架 8.7万冊, 閉架1.2万冊, 合計9.9万冊	(北海道岡田新一設計事務所 設計監理)
	1995	榛名町立図書館(現高崎市)	群馬県高崎市	(1F)	1000※	開架 4万冊, 閉架 3万冊, 合計 7万冊	530席コンサートホール併設/ JA970
	1990	幕別町図書館札内分館	北海道幕別町	1F	4,510	開架 5.1万冊, 閉架0.3万冊, 合計5.4万冊	(北海道岡田新一設計事務所 設計監理)800席コンサートホール併設/ 照明普及賞, 第13回北海道赤レンガ建築賞
	1999	吉田町立図書館	静岡県吉田町	2F	2,955	開架 7万冊, 閉架 6万冊, 合計 13万冊	第17回日本図書館協会建築賞/ 学遊園NO.12, 図書館の学校0004, Texture and Matiere, Tile & Architecture NO.21 / 国立教育政策研究所 平成21年度社会教育情報番組「社研の窓」第5回事例=参考にすべき新しい図書館として紹介されている
	1999	八雲町立図書館	北海道八雲町	2F	1,726	開架 6.5万冊, 閉架1万冊, 合計7.5万冊	(北海道岡田新一設計事務所 設計監理) 博物館との合築計画(将来)
	2002	ふじしろ中央図書館(現取手市)	茨城県取手市	2F	2,260	開架 10万冊, 閉架 10万冊, 合計 20万冊	季刊 文教施設03初春号
大学図書館	1979 2011改修	筑波大学中央図書館	茨城県つくば市	5F	14,960	開架110万冊 合計110万冊	第1回日本図書館協会建築賞, 建築業協会賞(BCS)/ 新建築8003, 建築文化8003 (基本計画・監修:筑波大学中央図書館設計小委員会+筑波大学施設部)/3期に分けて(2009~11)耐震補強+内装改修
	1986	拓殖大学中央図書館	東京都八王子市	4F	5,885	開架 6万冊, 閉架 94万冊, 合計100万冊	大学キャンパスの中心施設としての象徴性、利便性に配慮

面積欄: ※のついた複合の場合は, 図書館部分の面積を記載 / 階数: () は, 図書館部分のみのフロア数を表す

1 気仙沼図書館・気仙沼児童センター（宮城県）

- ・ 2018年3月開館。東日本大震災で被災した旧図書館の復興に、老朽化した児童センター建て替えを組み込んだ計画。2011年を境に様変わりさせないように配慮しつつ、未来志向の先進性を盛り込んだ設計です。
- ・ 設計・工事期間中から、完成後の活動を試行するワークショップを多数開催するなど、開館直後のスタートダッシュをスムーズにさせる協力を行なっています。

2 北茨城市図書館（茨城県）

- ・ 2017年6月開館。太平洋河口に近い大北川のカーブに呼応した緩やかに曲線を描く図書館です。ふるさとの童謡詩人野口雨情の記念館で飛ばされた“シャボン玉”が、舞い降りたような球形のお話し室などを散りばめた1階は児童図書エリアを中心に、カフェ、雑誌コーナーもあります。2階一般開架エリアへ子どもたちが上がりやすい階段をデザインしています。

3 八千代市立中央図書館・市民ギャラリー（千葉県）

- ・ 2015年7月開館。新川沿いの県立公園の中に立地。平屋の特性を活かし、上部から壁伝いに自然光を採り入れ、快適な空間の豊かさと省エネを実現しています。図書館へのみちゆきに市民ギャラリーやフリースペースを配し、多用途に使えるエントランスホールとともに、市民が刺激しあえる、新たな学習の場として多くの市民を集めています。

4 日進市立図書館（愛知県）

- ・ 2009年10月開館。<図書館ゾーン>と<ワークショップゾーン>を明快に分けつつ扉の開閉で境界を可変にし、相互のスペースの有効活用を図る融合型構成を提案しています。市民参加型ワークショップで設計を進めました。年間貸出の極めて多い図書館です。
- ・ 資料
 - ① コンセプト、機能構成ダイアグラム、連続ワークショップ記録
 - ② H24年度バリアフリー・ユニバーサルデザイン推進功労者内閣府特命担当大臣表彰優良賞＋第17回愛知県人にやさしい街づくり特別賞 説明シート

5 新潟市立中央図書館（新潟県）

- ・ 2007年10月開館。新「政令指定都市」新潟市における図書館サービス網（18図書館＋4図書室）の核となる中央図書館です。旧小学校や古信濃川の記憶を継承する建築環境や、住宅地におけるなじみやすさに配慮しました。直接利用者サービスとともに、ネットワークの物流機能、既存図書館群の活性化も主要な機能と捉えて設計しました。
- ・ 資料
 - ① 2009年12月「第31回図書館建築研修会 来館を促す建築的魅力」施主共同レジュメ
 - ② 勾玉型レファレンスデスクの開発記録
 - ③ 子どもたちを対象としたワークショップ記録
 - ④ 展示・掲示板のシステム化と運用事例
 - ⑤ 4年に一度出版される『年報子ども図書館・2011』より抜粋。
児童サービスを建築・施設面から検証するための事例として紹介されました。

6 我孫子市生涯学習センター「アビスタ」（千葉県）

- ・ 「図書館」と「公民館」の複合施設です。2002年4月開館。
- ・ 資料
 - ① 設計説明書より。写真にあるように、小さい子を連れた母親たちがふれあいの輪を広げ、リタイヤした高齢者が生きがいを見出し、家族の交流の場となる、など幅広い市民ニーズを受けとめる施設として定着しています。我孫子紹介展示パネルの制作も設計の一環として担当。

7 吉田町立図書館（静岡県）

- ・ 国立教育政策研究所 社会教育情報番組「社研の窓」第5回事例＝参考にすべき「新しい」図書館として紹介されています。開館10年を経た段階で、学校との連携など積極的な図書館の取り組み姿勢に対し「新しい」と評価されました。
- ・ 開館10年を機に、理科実験・工作など手を動かして学ぶ「ちいさな理科館」を増築。
- ・ 資料
 - ① 生涯学習誌『学遊園』NO.12 紹介記事
 - ② 交流ストリート活動記録：ワークショップ「色と遊ぼう！」は、開館1週間目に設計事務所が主催した時の記録。住民の皆さんが自発的な使い方を工夫していけるように、きっかけづくりを実施。展示壁は2週間サイクルで活発に利用されています。日頃の学習成果を発表したい潜在的ニーズをうまく引き出したとの評価をいただいています。

8 取手市ふじしろ図書館（茨城県）

- ・ 2003年4月開館（当時藤代町立中央図書館）。
- ・ 資料
 - ① 子ども現場見学会を開催した時の記録写真とおはなし原稿を添付。工事中から、ちびっこ図書館ファンを増やす試みとして企画。その後も、同様のワークショップを「日進市立図書館」「吉田町ちいさな理科館」「八千代市立中央図書館・市民ギャラリー」でも行い、マスコミにも取り上げられました。

9 あきる野市東部図書館エル

10 “ 中央図書館（東京都）

- ・ 2005年7月「東部図書館エル」が開館。公園の緑を、借景として、南の直射光を遮るスクリーンとして活用。ゆったりと落ち着けて時間を過ごせる地区館。
- ・ 好評につき、ひきつづき秋川駅近くに「中央図書館」の設計を受託、2007年開館。
- ・ 資料
 - ① 設計説明書より。ともに、明治大学メディア授業にて、現地取材による映像紹介事例（1コマ＝1.5時間丸ごと対象は唯一）に取り上げられています。

※「佐倉図書館等新町活性化複合施設（子育て支援機能、市史保存機能、展示機能その他）」
2020年3月実施設計が完了。2023年3月開館予定

気仙沼図書館・気仙沼児童センター



東正面外観。午後になっても光が回り込み、明るく市民を迎え入れる



小学校校庭からみた北側外観。スズカケノキに配慮して建つウィングが広場をつくる



旧館：サクラの間のサワラも大きく、街への視野は限定されていた



旧館：東向きの玄関。午後は陰に沈んで見えるのが難点であった



旧館：玄関に入ると、2階へ上る階段がみえた



新館：シルエットを復元しつつ、街への遠望も改善



新館：陰を強調しない平滑な壁面+光の回り込むアプローチの造形



新館：2階へのらせん階段。スズカケノキの葉を模した手摺パネル



配置図 S=1:1500



大空詩人 永井叔
 図書館 人 道
 行ク道ハ タノシミ。
 帰り道ハ ヨロコビ。
 糸井重里



1961 2018

ナニカハココニ
 ココロノナカニ
 糸井重里



石碑に刻まれた永井叔の詩(1961)に呼応する、糸井重里の言葉(2018)を、入口前のアルミ館銘パネルと、エントランスホールの壁に、切り抜き文字で表出させた。エントランスまでのアプローチは、半世紀以上の時空を越えた「道」となり、気仙沼の歴史ある文化を語りつづける。



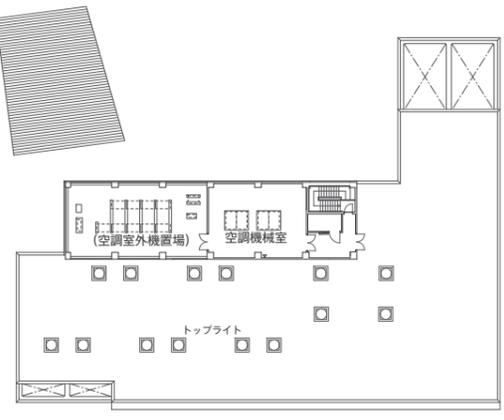
2階 図書館・一般図書エリア



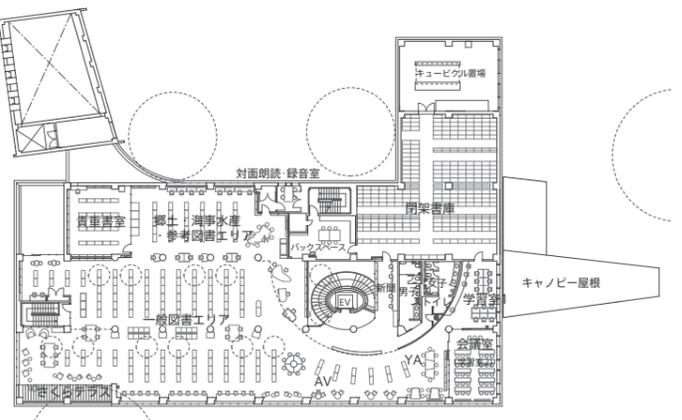
1階 図書館・児童図書エリア・絵本スペース



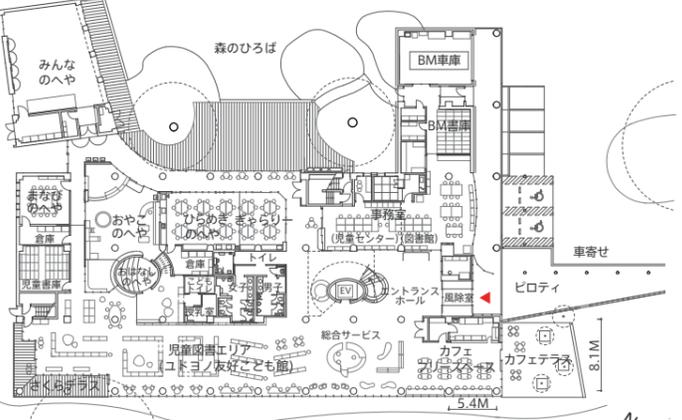
1階 児童センター・おやこのへや



3階平面図 S=1:800



2階平面図 S=1:800



1階平面図 S=1:800

設計主旨

2011年を境に、場の記憶を様変わりさせない

敷地は高台にあり、大震災で損傷を受けた旧図書館は、港から桜の樹林越しに遠望できた。新館はそのシルエットをほぼ再現している。エントランスの向きも同じ。入ってすぐ2階へ上がる階段が眼に入るのも、書架の間から桜が見える景色も継承している。地続きの小学校からみると、新館がこの地の守り神のような4本のスズカケノキに寄り添う形をしているのも良くわかる。祖父母に手を引かれて来る子どもたちは、いずれ自分の子どもを連れてくるだろう。そして孫に囲まれ訪れるようになる…。その子にとって、5代にも渡る家族の思い出、あるいは関わりのあった人々との記憶を辿れる場所、気仙沼に住み続ける愛着を感じとれる場所…。そうなることが、この建築の使命である。

歴史を尊重すると同時に、未来も志向する

気仙沼の将来を託す子どもたちの領域は1階を中心に展開している。「図書館」と「児童センター」の境はあいまいに、回遊性を持たせている。スズカケノキと共存するように張り出た2つのウィングが「森のひろば」をつくっている。事務室も一体化しているので協働が日々深化している。2階は「図書館」の一般図書エリアを中心とし、中央階段を上がったところにティーンズコーナーがある。海産水産や郷土資料など、気仙沼を再確認し、創生していくためのエリアもまとまっている。工夫を重ねて使いこなせる書架やサインの可変・更新性や、家具のアクリルのエッジが向きにより優しい光を帯びて見えるなど「気持ち明るくする光の心理的効果」にもこだわっている。

建物概要

- [建築名称] 気仙沼図書館・気仙沼児童センター
- [発注者] 気仙沼市長 菅原 茂
- [用途] 図書館・児童センター
- [住所] 宮城県気仙沼市笹が陣3番30号
- [設計監理] (株)岡田新一設計事務所 / 構造:(株)織本構造 設計/設備:(株)環境エンジニアリング / ランドスケープデザイン:(株)背景計画研究所
- [施工] 建築:(株)クマケ建設 / 電気設備:白石電気工事(株) / 機械設備:(株)米倉設備工業 / 外構:(株)アスリード
- [規模] 構造:RC造 一部S造/階数:地上3階 敷地面積:7,664.57㎡/建築面積:1,874.95㎡ 延べ面積3,301.02㎡(図書館2,757.52㎡児童センター463.88㎡)

- [総事業費] 約2,000,000,000円
- [設計期間] 2014年12月～2016年3月
- [工事期間] 2016年9月～2018年3月
- [主な外部仕上] 屋根:アスファルト防水押えコンクリート フッ素樹脂塗装ガルバリウム鋼板葺 外壁:せつ器質タイル張(2階75角、3階50角) RC打放フッ素樹脂塗装、アルミスバンドレル
- [主な内部仕上] 床:ナイロン電着カーペット、リノリウム床シート等 壁:EP-G、一部掲示板仕様クリア塗装 天井:岩綿吸音板、トップライト周囲へら絞り金物 図書館書架:児童=木製書架、一般=スチール本体 棚板 木製・側板 気仙沼産杉縦格子+色フィルム張 アクリル棒挟み込み

名称：気仙沼図書館・児童センター設計にかかる
「表土保全のワークショップ」

開催日時：平成28年5月25日（水）9：35～11：25（2～3時間目）

開催場所：気仙沼図書館・児童センター建設地+気仙沼小学校理科教室

企画進行：気仙沼市教育委員会/気仙沼図書館/気仙沼小学校

岡田新一設計事務所（建築）/背景計画研究所(ランドスケープ)

/地域自然財産研究所(生態学)

出席：気仙沼小学校3年生32名

目的：「気仙沼図書館・児童センター」は、移植できない大樹（スズカケノキ、サクラ等）を避けて設計されている。移植可能な樹は、新館建設後に「森のひろば」に帰れるまで、校庭隅に仮植する。土にはその場所ならではの個性がある。かけがえのない宝物（栄養の宝庫）として表土を保存しておき、移植後に樹元に戻す。落ち葉が土を肥やし、土が樹を太らせ、また落ち葉が土に還る。そこには多様な生物同士の共生がある。何げない自然を見つめる体験を通して、何かに気づくきっかけを期待するワークショップ。
—— 図書館・児童センターは、そうした学びの芽生えを、より確かなものにしていく拠点となる。



小学校側からみた図書館(完成予想模型)



建設用地に咲いていた水仙（3月）

2時間目（9：35～10：20）

- ①「水仙の球根」掘り
- ②「土に棲む虫」を採集



最初のあいさつ



「虫採集」に移る前に班ごとに集合



「虫採集」を行なう場所に移動して説明



集めた「水仙」を移植場所に運ぶ（植え付けは後日）



多種の「虫」に歓喜の声



「土」を粗めのふるいに掛けると多量の虫がパレットに落ちる。「落ち葉」の裏にも多く付いている。あまりの数、種類の多さに驚く

休み時間中、着替えも忘れて、質問にきたり、自分たちで顕微鏡を操作し熱中する子どもたち



3時間目（10：40～11：25）

- ①「虫」を顕微鏡で観察
- ②「生態学」の話
- ③「ランドスケープデザイン」の話
- ④「建築・インテリア」の話



「生態学」の話

サメ、ワニ、クマ、ゴリラなどの頭部・歯の標本をみると、哺乳類は肉や魚に比べ消化しづらい野菜(植物)をよく噛めるように奥歯が発達しています。そんな哺乳類でも消化できない落ち葉を、土の中の虫たちは食べることができ、土の養分も増やしていきます。樹はそれを吸収し大きく育つことができます。このように、樹にとって自分の周りの土は大切なもの。だから、工事で傷まないように、あの土を残しておいて、移植後に根元に戻すのは意味のあることなのです。

「ランドスケープデザイン」の話

水仙の球根は、2年後に皆さんの手で、森のひろばに戻しましょう。この模型は学校の前の図書館に飾ってあるので、どこに植えればいいのか、考えてみてね。

「建築・インテリア」の話

児童書のある書架の形や並べ方は、たくさんの案を検討しています。どれがいいと思う？——「迷路みたいのがいい!」「でも危ないんじゃない?」など、活発な意見が飛び交った。



貼り絵 (コラージュ) をしてみませんか。
「気仙沼の〈色〉って、どんないろ？」

開催日時：平成29年3月18日 (土) 14:00~16:30
開催場所：気仙沼中央公民館、会議室2・3
主催：気仙沼市教育委員会／気仙沼図書館／保健福祉部子ども家庭課／岡田新一設計事務所
協力：Ristex 委託研究 立教大学河野哲也研究室

- 目的：1) 市民がなじみに感じている「色」の傾向を知り、建設中の図書館・児童センターの内外装「色彩計画」の参考とする。
- 2) 「色」への関心を高めるきっかけを提供する。「色」の美しさ、不思議さをより深く感じとることができれば、日々の暮らしは、さらに楽しくなるはず。
- 3) 立教大学河野哲也教授主催「てつがく探検隊」と歩調をあわせ「地域創生」を視野に置く。“気仙沼の良さ・らしさ”を考え、発信力を高めるうえでブランディング・デザインは重要。身の回りの「色」に敏感であることは、そのための「感性」を磨く。
- 4) 既に「色」に着目した“気仙沼ブランド”もある。気仙沼の良さを発信するうえで「色」は使える。その活用法を市民同士で極めていくために、図書館は、豊富な資料と調べる環境、活動できる場もあり、学びあう発信拠点になりうる。

- <切抜用雑誌>
①『トランヴェール』全員同じ号
②『翼の王国』 違う号を配布
- <張付用紙>
NTラシヤ紙 (グレー地) A5判+葉書判
- <切取方法>
①定規をあてカッターで切る
②ハサミで自由に裁断 ③手で破る …

※参考資料とともに、カッターマット、定規、スティックのり、残った雑誌は、家で継続できるように、お持ち帰り



コラージュ風景 (正味75分程度)



図書館から推薦、色を学べる蔵書展示



サンプルを示して、切り方や貼り方説明、および参考資料を配布して、色を学べる本を紹介 (ナビゲーターは、岡田新一設計事務所の柳瀬+進藤)



河野哲也先生指導による鑑賞・講評会。3グループに分けた作品群から良いと感じる作品を選ぶこと、他の人の評価を聴くことにより、年齢を越えて、お互いに学びあえる機会となった (改めて、子どものセンスに感じ入る大人が多かった)

<参加人数>
・小学生以下：1名 (男1)
・小学生：15名 (男2 女13)
・中学生：2名 (男2)
・高校生：2名 (女2)
・大人：13名 (男3 女11)
合計人数：34名 (男8 女26)

<作品数>
43作品

<共通するイメージ>
海：28作品
山：18作品
空：10作品
花：7作品
夕日：7作品

<作品に貼り込まれている言葉から>
楽園 春 夢 山 水 風 美しさ 絶景 …

<裏書コメントやアンケートに登場する言葉から>
海 山 青 緑 自然 光 空 夕日 花 希望 …

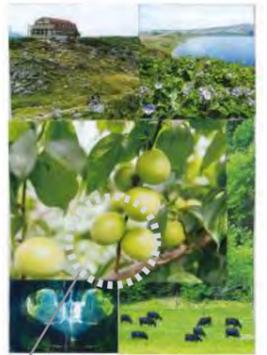
※各作品のコメント、アンケートは別紙参照



<共通誌『トランヴェール』で採用の多かった写真>
多くの人が選んだ写真 (色) からうかがえること



12作品で採用
波の「きらめき」が鮮やかに見える濃い青色キラキラ感



7作品
実り山の豊かさみずみずしさ



10作品
透明感 緑みのある明るい青色



5作品
夕日、きらめく海空の色の变化

<今回のワークショップを通して、推測できること>

- ・気仙沼の色を、海や山など自然の情景からイメージしている作品が多い。
- ・雑誌『翼の王国』にはイラストや色ベタ印刷が多いにも係らず、ほとんどの人が写真から切り出していることから、均一に塗った人工物ではなく、自然のなかから探そうとした意識がうかがえる。
- ・同じ自然の情景でも「光」の絡む色が多く選ばれている。海のさざなみ、朝夕の天海のきらめき、カツオやサンマの活きのよい照り…
気仙沼の「色」は、「光」と密接に絡んでいる。
“明るい” “きらきら” “透明感” …
- ・青色：基調色に選んだ作品が過半数。緑との組み合わせに加え、青そのものに緑みを含む色が多いのは、海の色イメージに基づくと思われる。
- ・緑色：デリケートな感覚で緑の配色を楽しんでいる。海の緑みは、対岸の森、プランクトン、海藻などが組み合わせられて醸し出す色か。山の緑は立体的で眼に入りやすい。樹の緑は光を受けてみずみずしい…
気仙沼の「緑」は多様。それが、各作品に投影されるように思われる。
- ・暖色系 (赤、オレンジ、ピンク、黄色)：花、ホヤ・マグロ等海産物、夕日など朝夕の情景。背景 (地) ではなく、ポイント (図) が多い。
- ・無彩色系 (黒、白、灰色)：ほとんど見受けられない。

<全43作品>
以下7名が2枚以上作成
No.1,24
No.5,42
No.6,43
No.10,14,16,41
No.15,40
No.21,28
No.25,39

開館記念ワークショップ

世界にひとつだけの「磁石」をつくろう！

開催日時：平成30年3月31日(土) 13:00~14:30(16:00)

開催場所：気仙沼図書館・児童センター ひらめきのへや

主催：気仙沼図書館・児童センター+岡田新一設計事務所

目的：磁石シートをはさみで自由な形(星形など)に切り抜き、油性マーカーで絵を添えて、世界にひとつしかない磁石をつくる。

おうち用とともに館内用もつくる。

自分で作った磁石が館内で実際に活かされているのを見た時、子どもたちはきっと喜びを感じるだろう、そう願うワークショップ

①「ぎやらりー・ひらめきのへや」「おやこのへや」などの入口横ガラススクリーンに貼った白丸掲示板は、A4サイズのチラシ等を張る前提

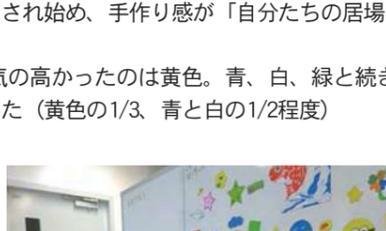
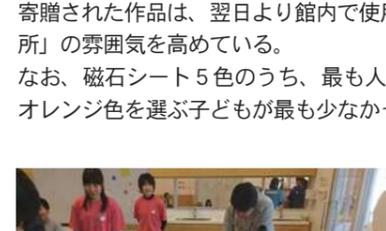
一般的な磁石では乳幼児が呑み込んでしまう恐れがあるので、ある程度の大きさのシート状磁石が適している
館内いたるところのスチール扉などにも張り出しできる。

②「おやこのへや」にある磁石の付くホワイトボードで、シートは遊びができる、●▲■などの形もつくれるとよい。

<進行手順>

岡田新一設計事務所3名(進藤麻理・小林信策・柳瀬寛夫)と、気仙沼児童センター職員数名がナビゲート

- ①あらかじめ、ワークデスクをセット
台形デスク3台(魚型に付ける) = 9席×2
同デスク2台(六角形に付ける) = 6席×1セット = 計24席
- ②テーブルごとに道具を用意(はさみ人数分、油性マーカー、鉛筆・消しゴム、ウェットティッシュ共用)
- ③入口横の白丸掲示板に、A4サイズのチラシをサンプルの磁石で張りだして廊下で呼び込み(実際にはオープン前に行列ができ、その後も希望者が途切れず呼び込み不要であった)
- ④入口横で磁石シート配布、好きな色1枚ずつ
- ⑤空いた席を勧める。
- ⑥できた作品の裏に名前を書いてもらう。
- ⑦油性マーカーが完全に乾くまで、ホワイトボードに張っておく。(張るスペースは、おうち用、館に寄贈用に分ける)
- ⑧おうち用を袋に入れておしまい、次の人に交代する。



ホワイトボードに仮張りされた作品群

1時間30分の予定でスタートしたが、希望者が途切れず3時間開催
参加者は同伴の大人も含めると150名程度。館へ寄贈は100点以上あった。
切り取った後の残りの形に、面白さを見出した作品もある。
寄贈された作品は、翌日より館内で使用され始め、手作り感が「自分たちの居場所」の雰囲気を高めている。
なお、磁石シート5色のうち、最も人気の高かったのは黄色。青、白、緑と続き、オレンジ色を選ぶ子どもが最も少なかった(黄色の1/3、青と白の1/2程度)

メッセージ入りの作品も目立った。
持ち帰り用のなかに「いつもありがとうございます」と書かれた作品があった。帰って冷蔵庫の扉に張るのだろうか—
それをみたお母さんはきつううれしいだろう！
もう一度、このワークショップを行う場合、「めざせ、糸井重里！メッセージマグネットを誰かに贈ろう!!ワークショップ」もありかな?と、子どもたちのたくましくもほほえましい創造力に、期待を高めた一日となった。

<準備>

- ①磁石シート(142mm×125mm)
5色(オレンジ、黄、緑、青、白)×56枚=計280枚 →OS(事前送付)
 - ②油性マーカー(30本程度)
 - ③●▲■など切り抜き用型紙(厚紙特製) →OS(持参)
 - ④貸出用はさみ 25個程度 →市
 - ⑤鉛筆、消しゴム(適宜) 油性マーカーは消しゴムで消せる →市
 - ⑥ゴミ箱(最低4個、デスクごと) →市
 - ⑦ウェットティッシュ(4個) →市
 - ⑧持ち帰り用袋(150枚程度) →OS(持参)
 - ⑨いらぬ紙(デスク保護用) →市
 - ⑩カッター+マット(ナビゲーター用:数字の中をくりぬくなど)
→各自(ほとんど使う余裕がなかった)
- ※受講者に持参してもらうものは特になし

名称：気仙沼図書館で地域価値発見：フィールドワークと哲学カフェ
「気仙沼てつがく探検隊」

開催日時：平成28年10月30日(日)9:30~16:00

開催場所：気仙沼図書館および周辺地域、気仙沼中央公民館

主催：立教大学SFR共同研究プロジェクト
「立教大学文学部河野哲也研究室」

共催：気仙沼市教育委員会、気仙沼図書館、岡田新一設計事務所
協力：面工房主宰齊藤典夫氏、気仙沼カトリック幼稚園

参加：ジュニア・リーダー(小・中学生7名)

立教大学ファシリテーター・スタッフ：河野哲也(文学部教育学科教授)
中村百合子(文学部学校・社会教育講座准教授)、奇二正彦(生態計画
研究所主任研究員)、福井夏海(異文化コミュニケーション研究科博士課程
前期課程修了生)、渡邊文(文学研究科博士課程前期課程)

気仙沼市担当：熊谷英樹(気仙沼図書館長)、千田基嗣(本吉図書館長)
千葉正幸(生涯学習課長補佐)、神谷卓也(同生涯学習係主幹)

記録：柳瀬寛夫(岡田新一設計事務所取締役社長)、進藤麻理(同図書館設計担当)

特別参加：Joan Portell Rifà夫妻(ジョアン・ポルテル・リフ：スペイン・カタ
ロニア州パルセロナ在住 児童文学者/絵本作家)、Gareth Jones(ギャ
レス・ジョーンズ：香港聖公会神学院院長)、高橋一也(陸前高田市役所)

目的：学年を越えて子どもたちが集まり、地域の自然と文化、歴史、
産業を「フィールドワーク」で体験し、自分たちの住んで
いる場所の価値と問題を見つめ直し、これからどのような地域
社会をどのようにつくっていけばよいかを「哲学カフェ」で
話し合う。対話を通し、見出した自らの関心・探究課題につ
いて、「図書館」で個々人が資料の探索を行う。
(なお、図書館は新館の完成まで仮設利用のため、「哲学カフェ」は
中央公民館に会場を借りた。)



1. フィールドワーク：ファシリテーター奇二正彦(9:30~12:30)

①中央公民館に集合、オリエンテーションの後、車にて仮設図書館へ。
そこからスタート。双眼鏡、ルーペ、プラスチックカップ、ジップロックを各自に
配付。2班に分かれ1名が筆記係としてクリップボードのマップに気づいたことを
記録。生態学の専門家であるファシリテーターが歩きながら、解説+問いかける。
子どもたちは自分たちの眼と感覚でさまざまな発見を繰り返した。



用具類の使い方説明



植物、昆虫、鳥、天候...そして墓地を
抜けると「海」が開けて見えた。その
手前、カトリック幼稚園では家族参加
の園祭(作品展)でにぎわっていた



②カトリック
幼稚園にて、
作品展を見学。
そのクオリテ
ィの高さにみ
な感嘆



④戻ってから、採集成果をみんなで再確認

2. 哲学カフェ：ファシリテーター 河野哲也、書記 渡邊文(13:30~15:00)

①立教大学ビデオ教材をもとに趣旨・進め方を説明 ②椅子取りゲームにて座席を決定 ③毛糸
を巻きながら自己紹介 ④ファシリテーターが毛糸の芯を抜き束ねてコミュニケーションボールを
完成 ⑤そのボールを持った人が喋る手順でスタート。 子ども7名に、ファシリテーターを含め
大人8名を加え議論しあう。まず、本日のフィールドワークを通して気づいたことの発表。
次に、議論したいテーマをみんなで決定した。→「どうしたら身近なものに気づくようになる?」



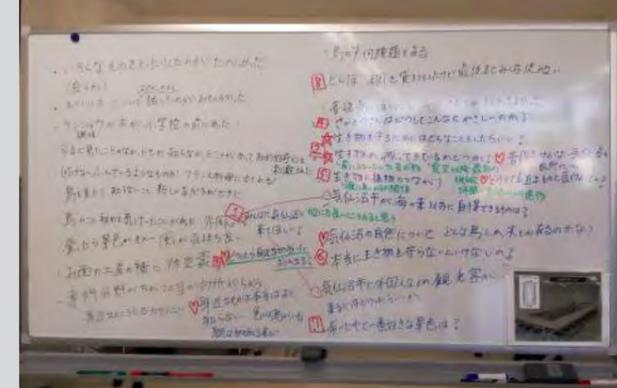
議論したいテーマを目を伏せて多数決



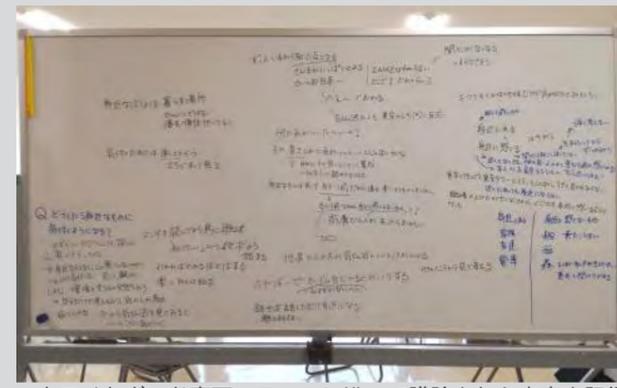
コミュニケーションボールを持った人が発言

テーマに沿って議論を進めて
いるうちに、「身近にある」
と「身近に感じる」とは違う
ことに、みな気づかされた。
例えば、家族や友達、電車は
「身近に感じる」が、「海」
や「船」は身近にあっても
「身近に感じない」子どもた
ちが多かった。

「どうしたら身近なものに気
づくようになる?」というテ
ーマそのものが正確でなかつ
たことも指摘され、それぞれ
に問題意識を高めて終了した。



ホワイトボード表面：それぞれ気付いたことを列記、グルーピング



ホワイトボード裏面：テーマに沿って議論された内容を記録

3. 図書館にて本をさがす：(15:15~16:00過ぎ)

関心を深めた対象や課題を学べる本を探す。図書館の活用の仕方を改めて体験。
すべて終了後アンケート用紙に感想を書いてもらい解散。全員、次回も参加したいとの回答だった。



図書館長・司書から図書案内をしていただいた

名称：気仙沼図書館で地域価値発見：フィールドワークと哲学カフェ
「気仙沼てつがく探検隊」第2回

開催日時：平成29年3月19日(日)9:00~16:00

開催場所：気仙沼中央公民館、気仙沼図書館、舞根湾・九九鳴き浜

主催：Ristex委託研究「多世代哲学対話とプロジェクト学習による地方創生教育」・立教大学河野哲也研究室

共催：気仙沼市教育委員会、気仙沼図書館、岡田新一設計事務所

協力：「NPO法人 森は海の恋人」 畠山信 副理事長

参加：ジュニア・リーダー(小・中・高校生9名)

立教大学ファシリテーター・スタッフ：

河野哲也(文学部教育学科教授)、奇二正彦(生態計画研究所主任研究員、立教大学元兼任講師、帝京科学大学兼任講師)、柳瀬寛夫(岡田新一設計事務所 取締役社長、立教大学兼任講師)、福井夏海(異文化コミュニケーション研究科博士課程前期課程修了生)、院生学生：花井彩也子(文学研究科博士課程前期課程)、小出晋之将(比較文学研究科博士課程)、廣畑光希(社会学部4年)、進藤初音(教育学科3年生)、盛岡千帆(武蔵野大学教育学部3年生)

気仙沼市担当：熊谷英樹(気仙沼図書館長)、千田基嗣(本吉図書館長)

千葉正幸(生涯学習課長補佐)、神谷卓也(同 生涯学習係主幹)

本紙記録：柳瀬寛夫、進藤麻理(岡田新一設計事務所 図書館・児童センター設計担当)

目的：学年を越えて子どもたちが集まり、地域の自然と文化、歴史、産業を「フィールドワーク」で体験し、自分たちの住んでいる場所の価値と問題を見つめ直し、これからどのような地域社会をどのようにつくっていけばよいかを「哲学カフェ」で話し合う。対話を通し、見出した自らの関心・探究課題について、「図書館」で個々人が資料の探索を行う。(なお、図書館は新館の完成まで仮設利用のため、「哲学カフェ」は中央公民館に会場を借りた。)



研究所前の船着場から養殖筏に向かう



舞根森里海研究所 (NPO拠点施設)

①オリエンテーション
⑥まとめ・昼食

②牡蠣養殖筏

③対岸

④山越え

⑤九九鳴き浜 (国指定天然記念物)

ルートは、2/25事前調査にて決定

1. フィールドワーク：ファシリテーター畠山信 副理事長 (NPO法人 森は海の恋人) + サポート奇二正彦 (9:45~12:45)

①中央公民館に集合しバスで舞根へ。「NPO法人 森は海の恋人」の活動拠点「舞根森里海研究所」の多目的室にてオリエンテーション。畠山先生のわかりやすく楽しい話が始まる。風があるので櫓漕ぎ船でなく、動力船2艘で出発。



②牡蠣養殖筏に到着



筏から吊られたロープには牡蠣以外に、海藻やホヤなど多様な生き物が共生していることを観察



海藻のミル。海松色(みるいろ)の語源との説明。平安朝からの伝統色の名が海藻から採用されていることに改めて海の国日本を実感



市キャラクター「ほよぼよ」のモデル、ホヤ。植物プランクトンを餌とする動物。生きたホヤに初めて触る子がほとんど



牡蠣は、1個あたり200L/日の海水を濾し、植物プランクトンを栄養源とする。ロープ1本に50個、筏1台100本とすると、この筏だけでどれだけの海水を濾す働きをしているか? など、次々に面白い話題が飛び出してくる

海に落ちそうになりながら、筏に乗ってみる。15m海底まで見通せる



③対岸の浜にも蟹や貝など生き物が多い



④山を越えるとまた海がみえてくる



⑤国の天然記念物「九九鳴き浜」動物の足跡。爪から砂は細かく、歩くとクックッと鳴く イヌ科タヌキとわかる



波打ち際のワカメ。根元のメカブに触って食べてみる



⑥多目的室にてまとめの学習。食物連鎖、生物濃縮の事例などから、自然を守る大切さを聴く

2. 哲学カフェ：ファシリテーター

<テーマ設定まで及び全体指導>河野哲也、<テーマ対話>小学生グループ 花井彩也子 + 中学生グループ 廣畑光希(13:30~15:30)

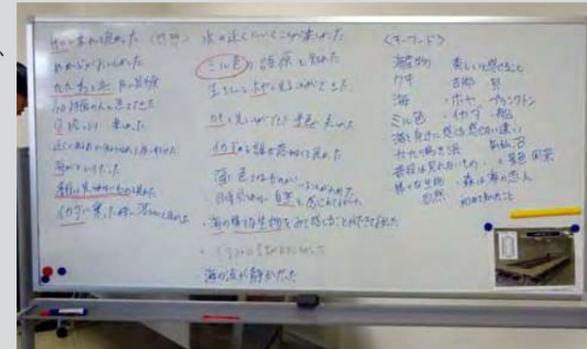
- 立教大学ビデオ教材をもとに、趣旨・進め方説明
- 呼び名を書いた紙を前に全員でスタート。前回作成したコミュニケーションボールを持つ人が喋るルールで、一人ずつフィールドワークの感想を述べ合う。次にキーワードを拾い出す。そして、キーワードから問いかけ(テーマ)を出し合い、多数決により1つに絞り込む。選ばれたテーマは、「自然を感じるって、どういふことか?」
- 小学生5名、中学生4名のグループに分かれ、大人たちも混じって、そのテーマについて話し合う。ファシリテーターが進行し、書記がホワイトボードに発言内容を書き込んでいく。
- 最後に、全員集まり、それぞれ気づいたことを発表しあった。



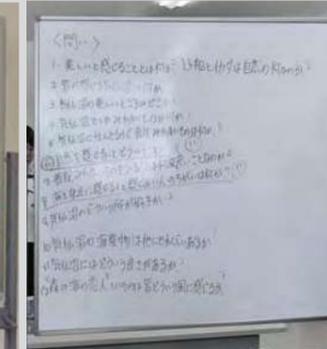
全員で対話する様子。各自呼んでほしい名前を紙に書いて、前に置いている



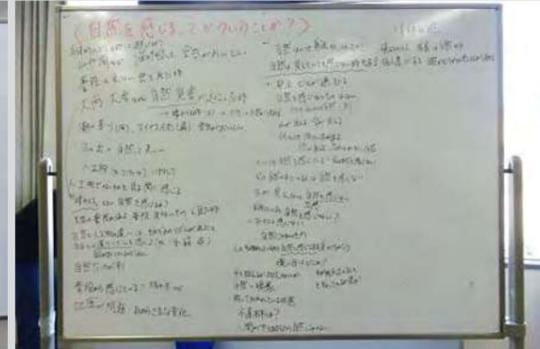
「自然を感じるって、どういふことか?」<中高生グループ> 具体的に感じるのは、空気がおいしい時、いつもと違う虫など見た時、普段みられない美しさ、自然災害にあった時、などが挙げられた。周りに山や木があふれている人は自然を感じないか? 室内にしていると感じない? 窓の外の景色に感じる、光が室内に反射する様にも自然を感じる、でも外よりは感じない。…人工物との違いは何か? 人が手を加えた植林は自然か? 成長は自然のなか、では自然を感じる境目は? 同じ人でもその時の状態によって感じ方は変わるのでは…などが話し合われた。最後に、自分では気づかない意見もあり楽しかった、などの感想が印象的だった。



ホワイトボード記録:<感想>



<キーワード>



<問い>

<自然を感じるって、どういふことか?>中高生の意見

3. 図書館にて本をさがす：

(15:30~16:00 過ぎ)

関心を深めた対象や課題を学べる本を探す。図書館長から本の分野ごとの並びや探し方の説明を受ける。図書館の活用の仕方を改めて体験。すべて終了後、ふりかえり(アンケート)用紙に感想を書いてもらった。初参加の5名は、哲学カフェの時間を、「ふしぎ」「貴重」「勉強」「交流できた」など新鮮に受け止めていた。2回目参加4名の言葉には「楽しい」がめだち、次回へのアイデアも具体的だった。



哲学カフェで「船」を話題にしていた小学生は、船を図解した本に飛びつき、床に座って読んでいた



高校生が小・中学生に解説しながら「海事・水産」の棚から本を手にとって。一日を共にした後の自然な光景に、ほほえましさを感じた



小学5年生から高校1年生まで、解散前に記念撮影

名称：気仙沼図書館で地域価値発見：フィールドワークと哲学カフェ
「気仙沼てつがく探検隊」第3回

開催日時：平成29年7月22日（土）～23日（日）

開催場所：気仙沼市立月立小学校および周辺

主催：Ristex「多世代哲学対話とプロジェクト学習による地方創生教育」（代表・立教大学河野哲也教授）

共催：気仙沼市教育委員会、気仙沼図書館、岡田新一設計事務所

協力：気仙沼市社会教育委員 小山茂樹氏

「八瀬・森の学校」代表田村泰二氏他2名

参加：ジュニア・リーダー（小・中・高校生6名）

立教大学ファシリテーター・スタッフ：

河野哲也（文学部教育学科教授）、奇二正彦（生態計画研究所主任研究員、立教大学元兼任講師、帝京科学大学兼任講師）、柳瀬寛夫（岡田新一設計事務所取締役社長、立教大学兼任講師）、廣畑光希（立教大学文学部研究科博士前期課程）、福井夏海（立教大学ESD研究所研究員）、得居千照（筑波大学院生）、進藤初音（立教大学教育学科4年生）、盛岡千帆（武蔵野大学教育学部4年生）、

気仙沼市担当：熊谷英樹（気仙沼図書館長）、山口和江（気仙沼図書館司書）

熊谷啓三（生涯学習課長補佐）、神谷卓也（同生涯学習係主幹）、

大山治子（生涯学習係）、渡邊貴登（生涯学習係）

本紙記録：柳瀬寛夫、小林信策（岡田新一設計事務所 気仙沼図書館・児童センター設計担当）

目的：学年を越えて子どもたちが集まり、地域の自然と文化、歴史、産業を「フィールドワーク」で体験し、自分たちの住んでいる場所の価値と問題を見つめ直し、これからどのような地域社会をどのようにつくっていけばよいかを「哲学カフェ」で話し合う。対話を通し、見出した自らの関心・探究課題について、「図書館」で個々人が資料の探索を行う。（なお今回は、図書館で選書したテーマ関連本を会場まで運んでいただいた。）



現 月立小学校グラウンド。傾斜地のため旧校舎や山すそは隠れ、近景と遠景が繋がって見える。自然の移ろいをはっきりと体感できる。それは偶然とはいえ桂離宮月見台や修学院離宮、圓通寺の庭づくりに共通する。気仙沼の里山は優れた景観スポットを随所に造りやすい（建築家の見立てを写真比較で解説；柳瀬）



木造旧校舎



「トトロ」に出てくるような月立小学校前バス停。宮崎駿監督がこの周辺を取材にきたとの話もあり、頷ける里山の風景



新体育館にテントを張り一泊

雨のため中止となったプログラム ①塚沢古墳：古墳に向き合う木立のなか、1300年を経て残されている祈りの空間に、何を感じるか ②グラウンドに寝そべり満天の星空を観察＋詩の朗読を聴く



1. 図書案内：気仙沼図書館山口司書（オリエンテーションの後、13：15～13：30）

今回の活動に関連する本を200冊弱、図書館から会場に運び自由に閲覧できるように開架。その内容紹介と利用の仕方を案内



2. フィールドワーク：ファシリテーター奇二正彦＋サポート小山茂樹氏（13：30～15：00頃豪雨により中断）

旧月立小学校下を流れる八瀬川に入って生き物観察、採集、築を仕掛ける。降雨のため塚沢古墳は断念



体育館に戻った途端、激しい雨に

採集してきた生き物の名前を本で調べる。ファシリテーターが補足解説



体育館の外は豪雨。そのなかでの調べ学習。手づかみでも獲れたヤマメのほか、イワナ、ドジョウ、ヤゴ、サワガニ…。気持ち悪いと話題をさらったのは孫太郎虫、ヘビトンボの幼虫でファシリテーターから古くから漢方薬として重宝がられたと聞いて盛り上がる。突然停電に見舞われたものの、スマホで照らしながら続けられ、何事もなかったような熱中ぶりに感動した

3. 晩ごはんをつくる（地元新鮮野菜と肉のカレー、ポテトサラダ等）：

準備・指導 生涯学習課、小山茂樹氏、立教大学ファシリテーター・スタッフ（17：00～19：00過ぎ）



木造旧校舎の一部を地元有志による「八瀬・森の学校」が活用されている。その調理室にて晩ごはんづくり。カレー、サラダの下ごしらえから協働作業。ご飯は大きな釜で炊いた。昇降口外では炭火ホルモン焼。どれもおいしくみな満足

4. 花炭をつくる：

雨対応プログラム。残り火を使いマツボックリ、ドングリの花炭をつくる。黒光りするきれいなお土産ができた



5. 朝ごはん：

翌朝、体育館にて朝食はセルフサービスのサンドイッチ



6. 哲学カフェ：ファシリテーター 河野哲也、廣畑光希（翌23日8：00～10：00）



<前半>

川遊び、採取した魚たちを川に戻したことなどを通して「自然を大切にしたい」思いが語られた。草も一本ずつ命があり人も同じ。ならば家畜や野菜は当たり前食しているのか、自然と人の手が加わったものの違いは？ 技術や科学を高めることによって人と自然の関係も変わる？などが話し合われた。対話を通して「改めて自然を見つめて考えたい」「肉や野菜を食べる時には感謝の気持ちを持ちたい」など自らの意思を確認する発言が多かった

<後半>

小学生から、授業の川遊びは一定場所。川の中を歩いて、いろいろな場所に違う生き物があることがわかったとの感想。ころばないように集中していたので、あっという間、短く感じた。その一方、一日が長く感じられたとの発言も。「時間を短く感じる」「長く感じる」とでは何が違う？、時間感覚は入り混じる？…などの意見が飛び交った。また「自然」に話題は戻り、自然を知る、親しむための採取は許される？、それでも愛しむ気持ちを持つべき、などが話し合われた

7. そば打ち体験＋昼食：「八瀬・森の学校」（10：30～12：30）



「八瀬・森の学校」の看板メニューである「そば打ち体験」。手作りの蕎麦に舌鼓を打つ

名称：気仙沼図書館で地域価値発見：フィールドワークと哲学カフェ
「気仙沼てつがく探検隊」第4回

開催日時：平成30年2月24日(土) ①一般・高校生対象「哲学カフェ」
25日(日) ②小～高校生対象「てつがく探検隊」

開催場所：気仙沼図書館・児童センターおよび中央公民館

主催：日本学術振興会 科学研究費研究基盤 (A) 17H0090
(代表・立教大学河野哲也教授)

共催：気仙沼市教育委員会、気仙沼図書館、気仙沼市子ども家庭課
岡田新一設計事務所

参加：①市民10名 男4 女6
高校生3、40代1、50代1、60代4、80代1名
②市民 9名 男2 女7
小学生4、中学生2、高校生3名

立教大学ファシリテーター・スタッフ：

河野哲也 (文学部教育学科教授)、奇二正彦 (生態計画研究所主任研究員、立教大学元兼任講師、帝京科学大学兼任講師)、柳瀬寛夫 (岡田新一設計事務所取締役社長、立教大学兼任講師)、廣畑光希 (立教大学文学部研究科博士前期課程)、得居千照 (筑波大学院生)、盛岡千帆 (武蔵野大学教育学部4年生)、関本幸 (立教研究員) /
同行者：豊田光世 (新潟大学准教授)、望月麻紀 (毎日新聞社)、大野智美 (インストラクショナルデザイン研究所)

気仙沼市担当：熊谷英樹 (気仙沼図書館長)、山口和江 (気仙沼図書館司書)
神谷卓也 (生涯学習課生涯学習係主幹)

本紙記録：柳瀬寛夫、進藤麻理 (岡田新一設計事務所 気仙沼図・児童センター設計担当)

目的：学年を越えて子どもたちが集まり、地域の自然と文化、歴史、産業を「フィールドワーク」で体験し、自分たちの住んでいる場所の価値と問題を見つめ直し、これからどのような地域社会をどのようにつくっていけばよいかを「哲学カフェ」で話し合う。対話を通し、見出した自らの関心・探究課題について、「図書館」で個人が資料の探索を行う。
今回、初めて一般・高校生対象の「哲学カフェ」も開催した。

■ 25日(日) 「てつがく探検隊」小～高校生対象：

9:00～9:30 オリエンテーション・鳥の話 / 講師 奇二正彦
9:30～11:30 フィールドワーク /

ファシリテーター 奇二正彦、協力：熊谷図書館長

11:30～12:30 昼食

12:30～14:00 新施設見学・図書館の本の話 / 案内 図書館+設計事務所

14:15～16:15 てつがくカフェ / ファシリテーター 廣畑他立教大学チーム

16:15～16:30 アンケート等まとめ

1. オリエンテーション・鳥の話

観察に先立ち、鳥の種類や見分け方など、羽ばたいてみる、絵をかいてみるなどの体験を通して楽しく学ぶ



2. フィールドワーク 中央公民館を出発、歩いて→大川 →坂道を登って気仙沼公園 →新図書館・児童センターまで



大川で水鳥観察。マガモ、オナガガモ、キンクロハジロなど

急坂を登りながら春の準備する植物や野鳥などの観察。気仙沼公園でもフィールドサイン(かじられたマツボックリの仕業はリスかカラスか…)などをファシリテーターの解説を聞きながら熱心に観察。図書館に戻ってから熊谷図書館長が長年撮りためた鳥の写真パネルをみて観察できた種類を再確認

3. 新施設見学・図書館の本の話

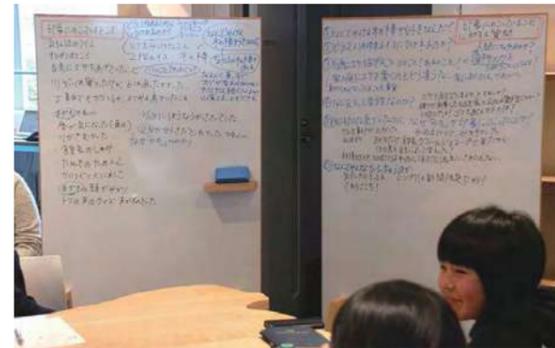


開館準備中の館内を視察後、山口司書が解説。ひとくちに「鳥」の本といっても、網羅的な図鑑、ハクチョウなど特定種、季節ごとの鳥、物語の中の鳥など、様々な視点の本がある

4. てつがくカフェ



昼食後、どこで「対話」を続けたいかを話し合う。①気仙沼のかたちのテーブル ②書架のなか(複雑に囲まれた児童書架)の決選投票となり、①に決定



年齢差に懸念のあった小2女児が、高校生たちを相手に自分の意見を堂々と述べていたことに感動(右下)

ファシリテーターを含め13名：

①フィールドワークで印象に残ったことを各人が発表し、②お互いの質問から、さらに話し合いたいテーマとして「なぜみんな木の棒が好きなんだ？」が選ばれた(小2女児が歩きながらずっと木の棒を持っていた)

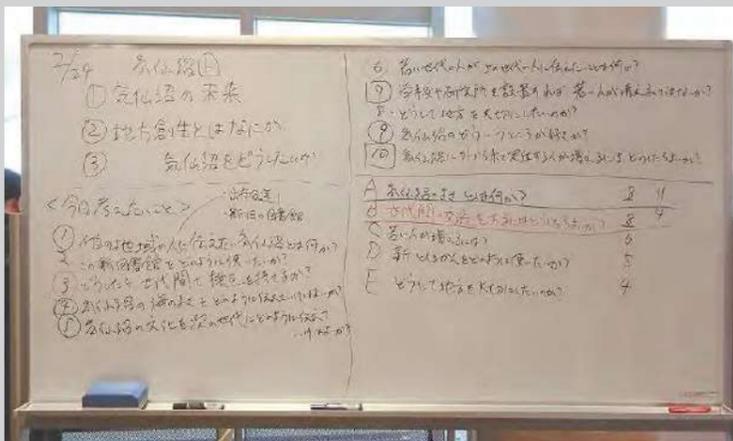
- ・いつの間にか拾ってしまう
- ・さわりごち、まっすぐなものがいい
- ・何かに使おうというのではないが、ウンコをかき回したり、虫の卵をついたり…
- ・拾っていいもの、石、セミの抜け殻、木の実…
- ・使えないから拾ったことがない(1名)
- ・トトロで妹が「あ、ドングリ！」と言って拾っていた。ポケットからこぼれても気にしない=なくても困らない、それと同じ感覚
- ・自分で見つけたことに意味がある
- ・目的のない遊びも大事ではないか…

などが話し合われ、たわいのない1つの疑問からでも思考は広がっていくことを実感

■ 24日(土) 「哲学カフェ」一般・高校生対象：

13:00～14:00 挨拶・新施設準備見学 / 案内役 図書館+設計事務所

14:00～16:00 哲学カフェ / ファシリテーター河野哲也、立教大学スタッフ



1. 開館準備中の新施設見学



館内を見学、2階からの遠望も実感

2. 哲学カフェ ファシリテーターを含め17名：

①気仙沼の未来②地方創生とは何か③気仙沼をどうしたいか、の視点から「今日考えたいこと」をそれぞれ発言、その中から多数決で「気仙沼の良さとは何か？」がテーマに選ばれ、話し合った。

→自然環境、海の幸、気質、誰もが認める良さ、これからの可能性…が主に論じられた。

- ・どこにでもある海、どこにもない気仙沼の海
 - ・自分が感じている気仙沼の良さ、残したい良さ
 - ・新しいことより、今ある良さを活かすべきか
 - ・排他的でない良さ、おおらかさ
 - ・一旦外に出る、外から来た人の指摘で気づく良さ
 - ・外との交流で積み重ねてきた気仙沼の良さ
 - ・世代間交流を通して伝えたい良さ、脹らませたい良さ
 - ・金のかからない方法で、外から人を呼び込むには…
 - ・図書館は良さを論じ、発信できる場所…
- それぞれの考えを深めていくきっかけとなった



開館準備中の新施設内で開催



終了後に市長に報告+懇談

1. 設計主旨

北茨城市は、茨城県の最北端に位置し、市域の80%は山林、東は太平洋に面する。童謡作家「野口雨情」生家周辺の海岸線がなだらかであるのに対し、「岡倉天心」が愛でた五浦海岸は濤声響く崖地であるなど、変化に富む景勝地である。人口約4.3万人(2018.4月)。

2016年6月に開館した図書館は、緩やかにカーブする大北川に沿って曲線を描く。駐車場・都市公園もその延長ラインに合わせてデザインし、敷地周辺の統一感ある修景を図った。

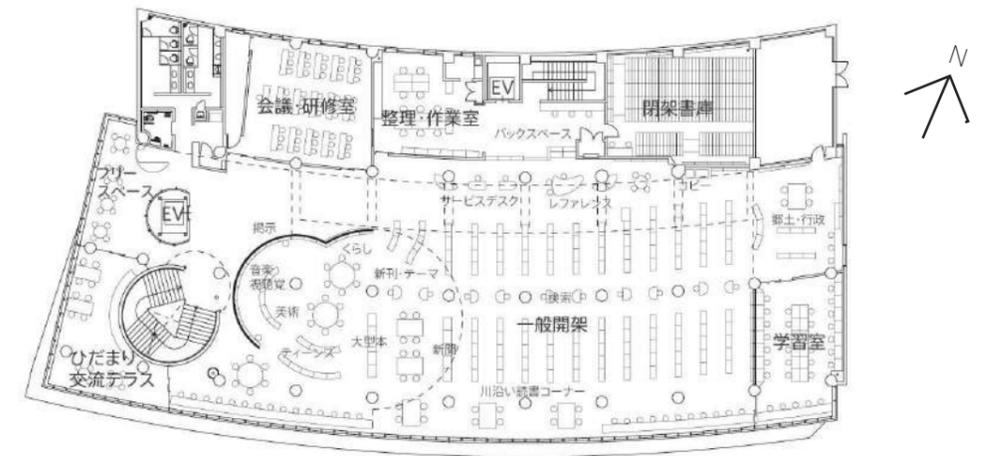
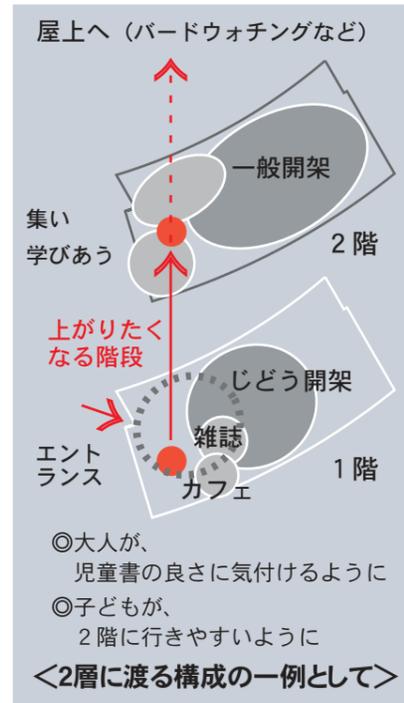
2. 狭い敷地における開架閲覧エリアのあり方

本図書館は、児童サービスに力を入れているので(一般図書6.5万に対し児童書3.5万点)、「じどう開架」を1階におくと、「一般開架」の大半は2階にせざるを得ない。2層に別れざるを得ない建築においても、子どもたちは成長に応じて2階に行きやすく、大人も児童図書の魅力を再発見しやすい場のつながり方を求めた。

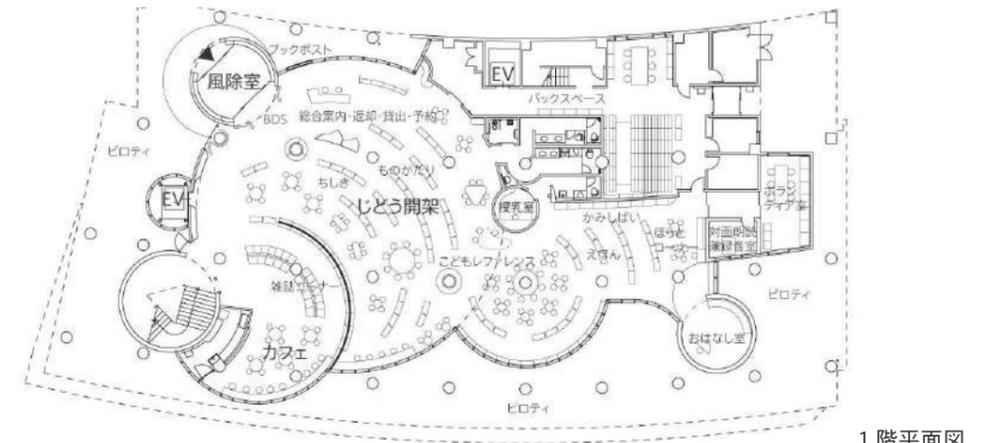
まず、1階においては、子どもにとって魅力ある空間、楽しい雰囲気を中心掛けている。2階へ向かう大人も児童書は面白い、使える!と気づくように、児童書がわくわくみえる空間構成や家具デザインも試みた。

また、一角にカフェ、雑誌コーナーを一体的に配し、大人も居やすい場所も用意した。子どもへの関心と理解を深め、子どもに優しい大人が増える効果を期待した。

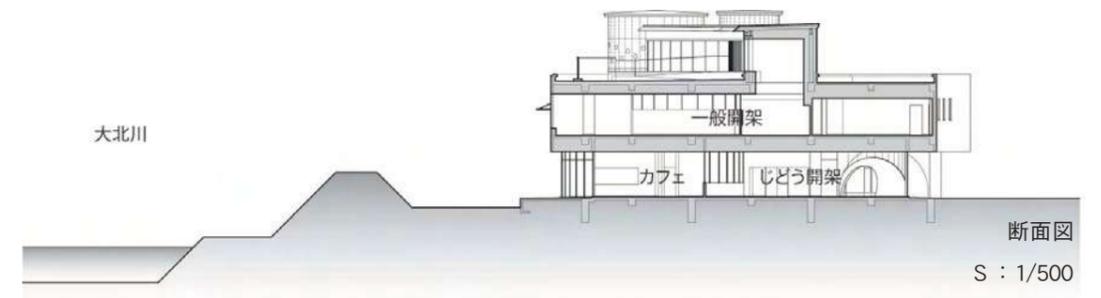
2階は階段周辺に、程よいざわめきを許容するフリースペース、日だまりテラス、展示スペースを配している。母親たちや中高生利用の多い「暮らし、美術、音楽、視聴覚、ティーンズ、テーマ図書」もすぐ見える場所に置くなど、1階とのつながりに配慮した。また、中置書架群を単純・コンパクトにレイアウト、川の見える窓側に落ち着いた座席群を配置するなど、全体を把握しやすく、かつ目的に応じた居場所を各所に見出しやすい学び+ふれあい環境をめざした。



2階平面図



1階平面図
S : 1/500



断面図
S : 1/500

3. 「野口雨情のふるさと」の図書館

野口雨情作詞の童謡「シャボン玉」は、地域の共通イメージであり、美しく輝く「個」と「群」の関係性がシャボン玉の魅力といえ、ひとりで「学ぶ」⇔仲間と「学びあう」、どちらの場合でも快適に過ごせる図書館のイメージと重なりあう。

そのイメージを建物全体の意匠に反映させ、ふるさとならではの心象風景を描き出したいと願った。その一つ、階段の壁に組み込んだ色ガラス玉入の円形窓は、太陽の光を受け、階段内壁に様々な色や模様を映し出す。その色ガラスを子どもたち自身の手で詰め込むワークショップもまた、子どもたちを2階へと誘う話題性の演出であった。



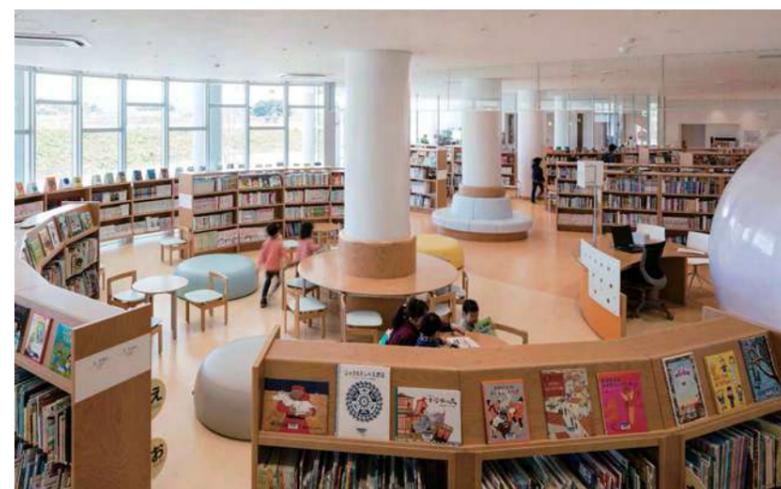
太平洋河口近くでカーブする大北川に沿った建築の外形



アプローチ側からみた外観。球体をした風除室から入る



2階 一般開架 4段目を平置きにして、部門の特長をアピール



1階 じどう開架 左：おはなし室、人が入れるシャボン玉のイメージ 右：絵本のあるスペース

[建築概要]

所在地	茨城県北茨城市磯原町本町2-5-16
地域地区	準工業地域、商業地域、準防火地域
主要用途	図書館
敷地面積	7,218.83㎡
建築面積	1,453.47㎡
延べ面積	2,509.56㎡
1階	938.28㎡
2階	1,453.47㎡
塔屋	117.81㎡

階数	地上2階／塔屋1階
最高高さ	19.4m
主なスパン	5.4m×8.4 (7.5) m
工事種別	新築
構造	鉄筋コンクリート造 一部鉄骨造
基礎	地盤改良杭 (テクノコラム工法)
蔵書収容力	開架115千+閉架110千=計225千冊
総座席数	351席 (うちデスクのある席324席)
開館年月日	2016年6月1日



側板のデザイン：川の流りに沿う列ごとに、レースカーテンを挟み込んだアクリル2枚の色を変え場を個性化させる



2階：川の見えるデスク



2階一般開架：書架列も川の流りに呼応し、緩やかにずれて、側板サインを見やすくさせている



同上：子どもたちも気軽に上がって来やすい環境



ワークショップでガラス玉を詰め込んだ円形窓は、太陽光を受け、階段内壁に色とりどりの模様を映し出し、子どもたちを2階へと誘う



左：1階 じどう開架の隣に雑誌・カフェがある



右：その利用者である大人が、ちしきの本が使えることに気づく

[建築概要]

住 所	千葉県八千代市村上2510番地
地域地区	市街化調整区域
主要用途	図書館・市民ギャラリー
敷地面積	10,500㎡
建築面積	5,580.27㎡
延べ面積	6,268.77㎡
1階	5,269.06㎡
2階	841.66㎡
塔屋	24.64㎡
駐輪場	1,334.1㎡
階 数	地上2階／塔屋1階
最高高さ	14.108m
主なスパン	7.2m×16.7m (開架エリア) 7.7 (8.0) m×10.8m (展示室)
工事種別	新築
構 造	鉄筋コンクリート造 一部鉄骨造、 免震構造・耐震壁付ラーメン構造
基 礎	既製コンクリート杭基礎

静かな川面に、ときおり風がさざ波を立てていく——。
新川のほとりに、川や風の流れるような幾筋もの壁を建て、そのあいだに空間をつくる。中心となる壁は正確に南北軸に沿っている。広々とした空から入る自然光は、壁に柔らかく拡散され、午前と午後とで表情を変えていく。
そうした光にやさしく包まれ、明るく豊かな気持ちになれる、市民のための空間づくり——。市民の生涯学習の幅を広げていくうえで、より高い相乗効果をめざして、①エントランスを挟んで左右に分ける合理的すぎる配置ではなく、大勢の図書館利用者が自然とギャラリーにも立ち寄りたくなる位置関係に、②両方の事務室を一体的に整備し、運営側も連携しやすくなるように、幾筋もの壁の置き方で刺激しあえる関係性を構築した。



新川沿いの県整備公園内、運動公園の南に位置する



フリースペース脇のエントランスキャノピー



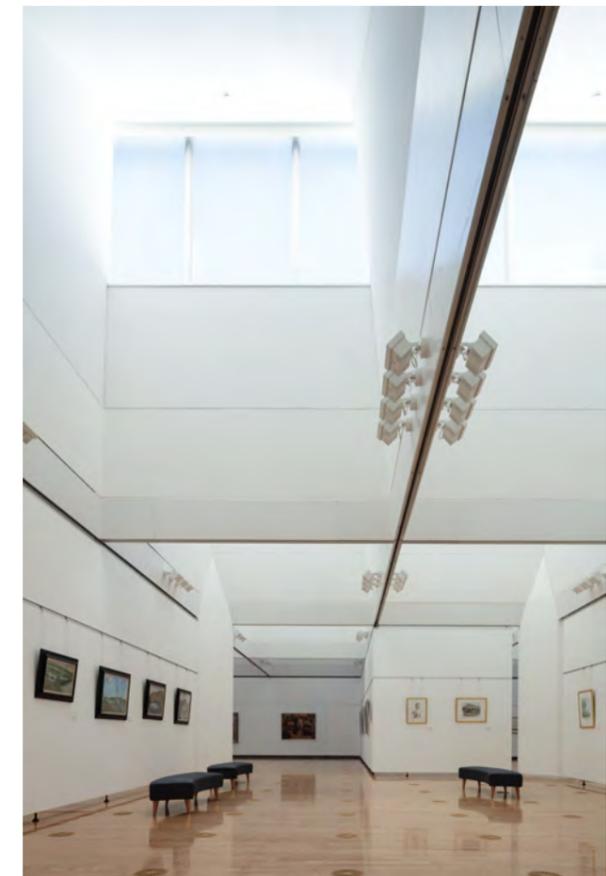
フリースペース：軽食販売しているが、持ち込みのお弁当でも自由に飲食可能なスペース



外壁：コンクリート特殊型 枠打ち放し、超汚染型弾性 フッ素樹脂エナメル塗装。それ以外では、妻壁：アルミスパンドレル アルマイト仕上、腰壁：せっき質タイル張 (ランダム張)



エントランスホール／上：図書館へのみちゆきの左にフリースペース、右にギャラリー、大勢の図書館利用者の行き帰りの利用を促す / 下：ギャラリー常設展示室入口。壁面イメージサインは、星裏一版画収蔵品から代表作「陽 (林)」を複写、サイン基調色ブルーに変換+拡大したもの / 左：さまざまなワークショップは、展示室内外どこでも開催できる。エントランスホールにその作品は展示され、市民活動を誘発



企画展示室 (展示室ホール、第1～4展示室・計466㎡)



一般開架エリア：
トップライトは、奥が南北軸に伸びる壁を
一様に洗うのに対し、手前側は1スパン
ごとに斜め天井に光を走らせて、場の
違いをわかりやすくさせている



一般書架：スチール本体、棚板は木製。
サインは室内の光にデリケートに反応、
きらめく素材として、ブルー系半透明の
アクリル板を使用している



図書館空間の中心軸となる総合サービスエリア：楕円のトップライトと、ブルーの柱案内サインが、利用者と図書館員との接点を象徴する



雑誌架：本屋と違い、利用頻度が高くなるほど背板がさみしく見えてしまうのが図書館雑誌架の宿命。そこで特別に染色された布が透けて見えるようにして、雑誌が減っても華やかさを保つように配慮。24連を「二十四節気」に見立てた色のデザイン。「春分」以降昼の長い12連と「秋分」以降夜の長い12連が相向かう配置。薄布は、生絹（すずし）で、京都「染司よしおか」五代目当主である吉岡幸雄氏に染めていただいた





エントランスホールから、児童開架がショーウィンドウのようにみえる



児童開架サービスデスク周辺



右側「ちしき」架は一般書架に準じた姿とし、一般への移行を促す



奥深い児童開架エリアへの自然光の採り入れ方

①トップライト：正確に南北軸に沿っているため、午前と午後では光の入り方の違いが分かる／②3つの光庭：「留まることなく成長する姿」をテーマにしたタペストリー加工ガラスで光の存在感を浮き立たせる／③丸窓：小部屋の採光。おはなし室は円盤が転がり暗転可能



上：おはなし室省脱サイン（人と動物の足跡）／中2点：児童トイレ内／下：女子トイレ内男児用小便器サインの一つ



「えほん」「ものがたり」架は、迷路のような小空間の連続を書架で作り込んでいる。遊び感覚で繰り返しの来館を促し、本との出会い、家族とのふれあいの場となるように



小学生を対象としたグループ学習室、「ちしき」架に隣接



「えほん」に隣接した「ほっとコーナー」は親同士の交流の場



いずれも、一般開架エリア内にて空間のゆとり、点在する座席、パソコンの数とそのバリエーションの多さが、子どもたちに居場所と認識させるきっかけをつくっている。ほとんどの子は、ソファでなくデスク付を選択している。多世代が混在利用する姿が、自然な形で発生することをワンフロア構成が促しており、「程よいざわめき」を許容する学びの空間が実現しつつある





どんな図書館ができるか。図面で予習



建設現場は安全第一



指差してる先に何が見えるかな



こんな図書館ができるよ。模型はわかりやすいね



免震だから建物と地面の間に隙間があるよ



免震ヒットに入る壁は貴重



普段は絶対に近寄れない超大型重機の下



この薄い紙で重い人形を支えることは出来る？

◆第1回◆

- 「完成したら見えなくなってしまう力持ち-建築もみんな助けあっている-」
「免震ってなに？模型で学ぼう」
(岡田新一設計事務所)
- 「働く車に乗ってみよう」
「足場の組立、鉄筋の結束を体験」
(前田建設工業+職人さん)



免震装置、これで建築を支えています



職人さんの指示したところが見えるかな？



職人さんの手つきはさすが



まるで現場の職人さんの眼差し



エンボーを運転してる気分になるね



鉄筋の結束、ぐるぐるぐるぐる楽しい



単管足場の組立体験、職人さん気分



現場ではレーザーで水平・垂直を確認します



高所作業車は気持ちいいね



墨出しで正確な2mの正方形が描けたかな？

(仮称)八千代市立中央図書館・市民ギャラリー

建設現場 親子見学会 記録

主催：八千代市 協力：岡田新一設計事務所・前田建設工業



第1回 2014年3月29日

第2回 2014年8月23日



◆第2回◆

- 「建築はどのようにできているの - 選材適所、力をあわせて -」
「免震ってどれくらい安心？」
(岡田新一設計事務所)
- 「工事現場を見てみよう」
「職人さん体験 墨出し、下げ祭り
測量、高所作業車など」
(前田建設工業+職人さん)

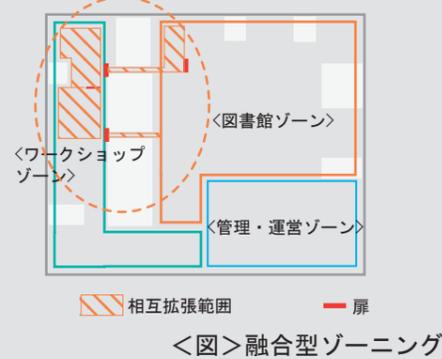
日進市立図書館

愛知県日進市蟹甲町中島地内中島3番外9筆
 延床面積 : 6,102㎡
 階数 : 地上2階
 蔵書収容力: 開架180,000冊
 閉架300,000冊
 開館 : 2008年10月1日

建築をつくるコンセプト

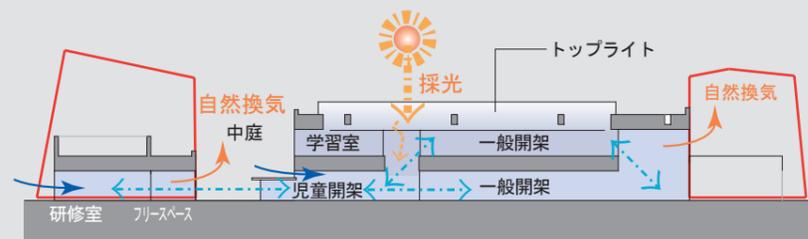
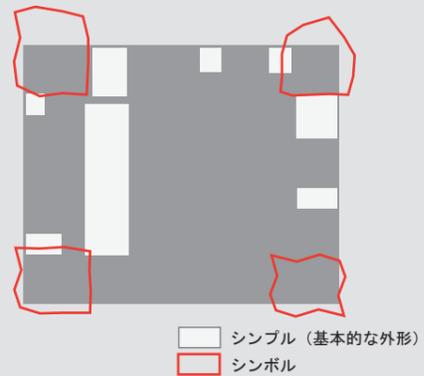
①ゾーニングの融合

〈図書館ゾーン〉と〈ワークショップゾーン〉の関係性の追及。
 2つのゾーンをBDS管理区域の内外で明確に分けつつ、扉の開閉によって境界を可変にし、相互のスペースの有効活用を図る。
 単一機能に満足せず、より多用途に使いこなせるように、融合型構成とする。



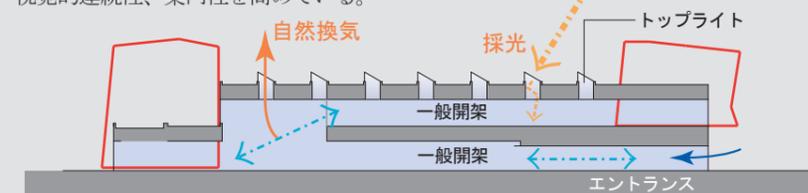
②「シンプル」&「シンボル」

骨格は「シンプル」な外形（一部に快適空間の融合を図る凹凸はある）を基本として、四隅に「シンボル」をつける。
 市内の四方から訪れる人々を迎える構えとして、4つそれぞれ表情の違うシンボルとしたい。
 (太陽、月、明けの星、宵の星)

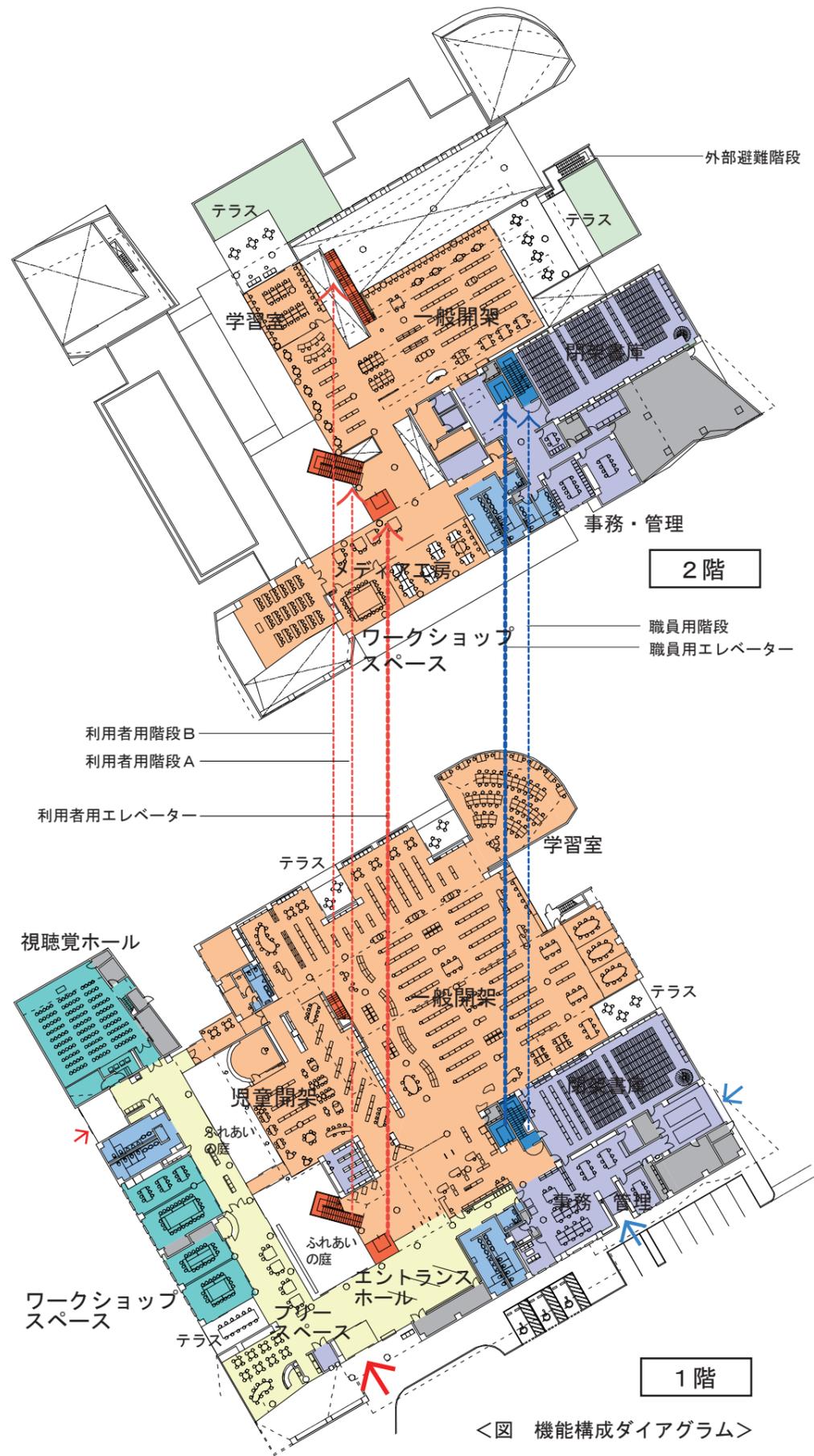


—断面(東西)—

平面的に広がりがあるため、中庭、吹抜け、トップライト、ガラス壁により採光、通風、視覚的連続性、案内性を高めている。



〈図〉断面ダイアグラム



連続ワークショップ（設計検討会）の記録から…実施設計中盤



2006/10/01 ①図書館との関わり方「お隣インタビュー」 ②大きな図面のなかに、人形のように訪れてみる「実体験イメージ・シミュレーション」 空間を読み取りやすいように模型も用意。



2006/10/08 ①「NDCを知ろう」 ②「ワークショップゾーンでのイベントを企画しよう」 完成後の具体的な使い方のアイデアが次々にほとばしる。



2006/10/15 ①「レファレンスとは」 ②「ヤングアダルトについて考えよう」 今回最も熱かったテーマ。議論白熱。

2006/10/22 「設計確認カルテを作成しよう」 市民要望や意見の内容確認、設計に盛り込まれているか、盛り込むべきかの検証と議論



2006/10/30 ワorkshopに参加していない市民への報告会。ワークショップに参加した市民による司会進行。

凡例

- 開架ゾーン
- 集会機能
- フリースペース
- 事務・作業
閉架書庫
- トイレ
- 一般用階段・E.V
- スタッフ用階段
- 一般動線
- スタッフ動線

■日進市立図書館

所在地：愛知県日進市蟹甲町中島3
開館：2008年10月
規模：延6,101.83㎡／RC、地上2階
蔵書：開架18万冊、閉架30万冊
設計：岡田新一設計事務所

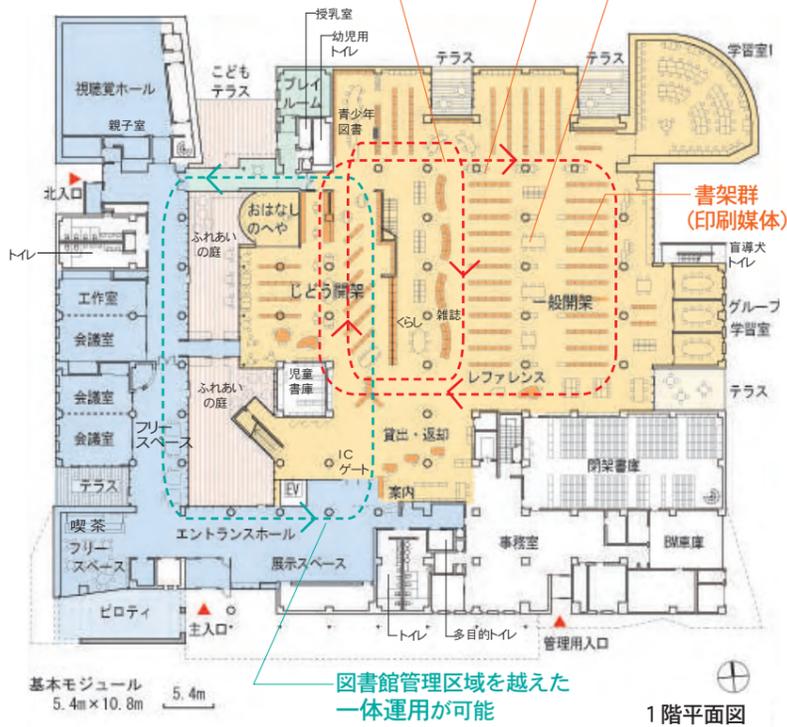
■「建築構成」に関する配慮：

わかりやすさを出発点。
館内のしくみ、本の所在、
館内での自分の居場所など……

(例) 1階の一般開架室では、書架群を大まかに、3グループに分けている。
その配置に関して配慮したこと

- ①「中置書架」を中心に構成、一筆書きのような分類の流れをわかりやすくする。「壁面書架」は、つながりがわかりにくいので、少なくする
- ②OPAC(蔵書検索)やパソコン席を中置書架群に並列させ、どの分野からも本(印刷媒体)とデジタル情報の、ハイブリッド利用をしやすい
- ③全体に回遊性を持たせ、全体を把握しやすくさせるとともに、「人の気配を感じさせる」=死角をなくし、防犯効果を高める など

回遊性=死角をつくらず、
見通しを良くする：
(図書館管理区域内・開架スペース)



基本モジュール 5.4m x 10.8m 1階平面図



上：ふれあいの庭は、「図書館ゾーン」と「ワークショップゾーン」を視覚的につなぐ



下：「じどう開架」と「ふれあいの庭」を一体利用できる

内外空間のつながり：館内のわかりやすさ、使い方の可能性を広げる



一般開架-1：見通しの良い書架・デスク等のレイアウト



一般開架-2：死角を最小限に抑え、安心感をかもし出す



一般開架-3：印刷媒体とデジタル情報のハイブリッド利用のしやすさ

■ティーンズの居場所として：
ティーンズ(青少年)が学び、集える
場所としてのあり方も、市民ワーク
ショップの大きなテーマの一つだった

結果として、青少年向図書のコーナー
やグループ学習室に限定せず、全館を
使いこなしている。他の世代とも、う
まくスペースを共有しあっている



休日の閉館後、友人と、しばし語らう青少年たち



フリースペースを、多世代が共有しあう。多少の会話を許容しあえる、図書館にあって貴重な場所

■じどう開架スペースの配慮：
子どもだけでなく、保護者やボ
ランティアなど大人たちも利用
する空間として

床材はアトピー性皮膚炎などの子
どもたちのため清潔を保ちやすく、
衝撃吸収力、低発音性にも優れた
シート張(アンダーレイシート下張)



プレイルーム：子ども用の他に保護者用ブースもあるトイレと、授乳室が隣接する



親子室(視聴覚ホール)：2家族が利用できる広さを持つ



じどう開架：椅子の高さは低くとも、座面を大きくしてあるので、親子が横並びできる。大人用の椅子も用意してあり、高齢者にも優しい



おはなしのへや：窓際ベンチは床に座るよりも楽。妊娠中の女性や高齢者などへの配慮

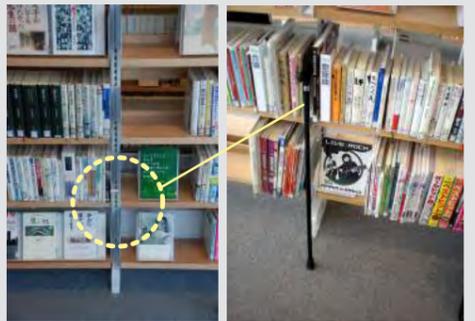
■高齢者・障がい者の
使いやすい施設として：
基本設計から竣工まで、市民の
方々とも数多くのワークショ
ップを行い、成果を随所に反映



さまざまな障害を持つ市民とのワークショップから生れた2例：
①本を探す時に杖を立て掛けられる金具、
②盲導犬リード掛けフックを紹介



一般書架：手に触れる棚を木製にしたスチール混合書架。足元を特に補強。サイン、展示台、ブックエンド、棚の変換性など、機能性をシステムデザイン



書架の「連」の間を開けた方が本の並びがわかりやすい
「連」のすき間を活用し、本を探す時に杖を立て掛ける金具(着脱式)を取付



多目的トイレ：1階と2階、同じ位置に1ヶ所ずつ設置。ただし器具レイアウトは左右反転させ、片麻痺の方の使いやすいタイプがどちらかにあるように配慮



男女各3ヵ所ある一般トイレ：すべてに車椅子利用者も使える大型ブースを設置。しかも器具レイアウトを左右反転、一般トイレにおいても逆勝手を選択できる



盲導犬リード掛けフック：一般トイレ、グループ学習室に設置。突起しないようにおわん状の凹みの中にフック(特注)

第31回 図書館建築研修会

来館を促す建築的魅力

非来館型利用が増える中で
“場としての図書館”を考える

2009年12月

社団法人 日本図書館協会

目次

- 3はじめに
(社)日本図書館協会施設委員会委員長 植松 貞夫
(筑波大学教授・附属図書館長)
- 7新しい府中市立図書館
—IC タグを活用して—
府中市立図書館サービス係長 坪井 茂美
- 15駅前図書サービスコーナーの設置と来館者促進への対応
浦安市立中央図書館長 森田 正己
- 24図書館の人気スポットを考える
—新潟市立中央図書館の試み—
(社)日本図書館協会施設委員会委員 柳瀬 寛夫
(岡田新一設計事務所副社長)
新潟市立中央図書館 山下 洋子
- 46来館を促す施設的な配慮
—滋賀県の大・中・小規模図書館の調査から—
(社)日本図書館協会施設委員会委員 中井 孝幸
(愛知工業大学准教授)

図書館の人気スポットを考える

新潟市立中央図書館の試み

柳瀬 寛夫*1

山下 洋子*2

*1 日本図書館協会施設委員会委員 (岡田新一設計事務所)

*2 新潟市立中央図書館

はじめに

ほんぽーと新潟市立中央図書館は、新潟市における図書館サービス網 (18 図書館+29 図書室) の中核として、35 万点の大規模開架スペースとともに、物流基地の機能も強化した図書館である。平成 19 年 10 月 1 日に開館、約 2 年が経過した。

以下の順に、本説明資料をまとめる。

1. 概要
2. 建築構成コンセプト、各階平面図
3. 外観および内観写真
4. 中央図書館開館後の運営の記録
5. 利用者満足度調査から見る施設面の評価
6. 人気スポットの検証

以下の 5 項目挙げ、それぞれ基本計画から設計を通して論じてきた経緯をまとめる。最後に、開館 2 年を経て、山下、柳瀬がそれぞれの立場で関わってきたことを踏まえ、現状の使い方を検証、評価する。

図書館は社会情勢、市民ニーズや行政方針により変化していくものであるが、現時点での評価を、関係者間で再度吟味し、より良い方向への変化に役立てたいと考える。

1) 子どものためのスペース

地域の児童サービスの拠点として (ティーンズへのサービスも重視)

2) 窓辺を中心とした開架部門の座席群

市民の多様な利用目的に対応すべく、さまざまな閲覧・読書・学習席を点在

3) 学習室 (さらなるハイブリッド利用を推進する効果にも注目)

学習室の存在が、書架周りの座席の自習利用を抑え、ハイブリッド利用も促す

4) 会話のある「空間」、語りかける「モノ」

大規模図書館でありながら、人の温もりを感じさせる図書館をめざして

5) 飲食できるスペース

長時間利用に伴い、飲食できるスペースに配慮

1. 概要

1) 建築概要

住所	新潟市明石 2 丁目 1 番 10 号
地域地区	近隣商業地域/準防火地域
主要用途	図書館
敷地面積	9,913.87 m ²
建築面積	4,556.45 m ²
延べ面積	9,132.13 m ²
	1 階 4,054.47 m ²
	2 階 3,189.81 m ²
	3 階 1,854.85 m ²
塔屋	33.00 m ²
階数	地上 3 階/塔屋 1 階
最高高さ	19.11m
工事種別	新築
構造	鉄筋コンクリート造 (一部鉄骨造)
基礎	場所打ち鋼管コンクリート杭 (拡底工法)

2) 蔵書構成 (収容可能点数)

<開架図書>	
一般図書	242,000 点
(外国語資料 10,000 点 大活字本 7,000 点含)	
特別コレクション	1,000 点
ティーンズ	5,000 点
マンガ	5,000 点
児童図書	32,000 点
児童図書研究	8,000 点
児童図書 (団体複本等)	5,000 点
参考図書	15,000 点
視聴覚	15,000 点
郷土・行政	22,000 点
計画蔵書点数 合計	350,000 点
+	
雑誌	1,000 誌
新聞	100 紙
<閉架書庫>	
自動出納書庫	450,000 点
郷土・行政書庫	27,000 点
特別コレクション収蔵庫	7,000 点

3) 諸室構成

<1 階>

エントランス/一般開架部門/対面朗読室/こどもとしゃかん/軽食喫茶 (BB Café)・休憩コーナー/受入作業・配本室/警備員室等

<2 階>

一般開架部門/参考図書・郷土行政図書部門/特別コレクション室/ティーンズコーナー/学習室/ボランティア活動室/事務室/コンピュータ室等

<3 階>

多目的ホール (定員 150 名程度)/研修室 1,2 (各定員 40 名程度)/保育室 (定員 15 名程度)/スタッフルーム (兼救護室)/自動出納書庫/機械室等

4) 主な仕上げなど

<外部仕上>

ビーンズ屋根 ステンレス (耐久性のあるフッ素樹脂焼付塗装) 粘接着工法
外壁 ①タイル張 (せっき質二丁掛) /②アルミコルゲート型材

ガラス 標準: 透明複層ガラス/一部: 遮熱高断熱複層ガラス (Low-E ガラス) / (外周部+高窓には飛散防止フィルム張=紫外線 99% カット)

<内部仕上>

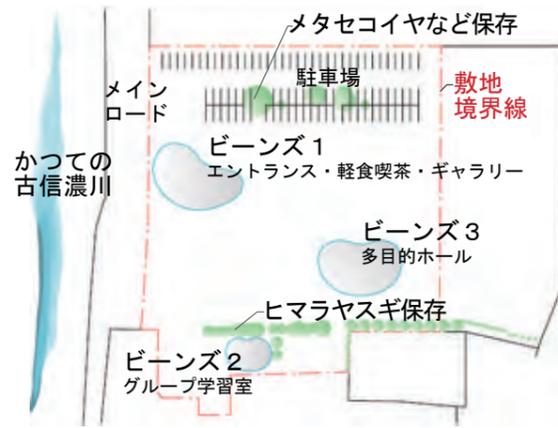
床材 一般開架+こどもとしゃかん: フローリング (メジロカバ) 張 /開架「緑の渚»: タイル
カーペット敷 /おはなし室: 床暖房フローリング (メジロカバ・桜色着色)

壁材 標準: 水性ウレタン塗装等 /こどもとしゃかん+おはなしのへや: 珪藻土 /トイレ: 木目化粧ポリエステル鋼板

天井材 一般開架+児童開架他: 岩綿吸音板塗装 /開架「緑の渚»: 火山性ガラス質複層板 (米つが材練付クリア塗装仕上) /スパイン (総合サービスエリア): 光天井 (ガラスクロス+特殊フッ素樹脂の不燃複合素材 蛍光灯内蔵)

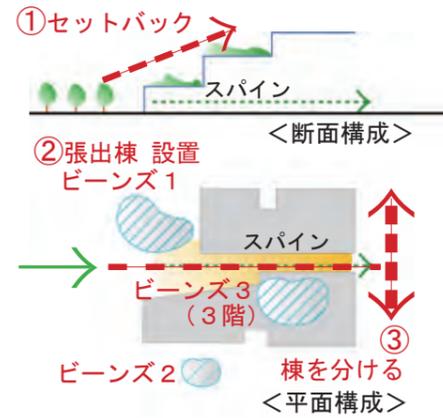
2. 建築コンセプト、各階平面図

A. 敷地に残る「記憶」の尊重



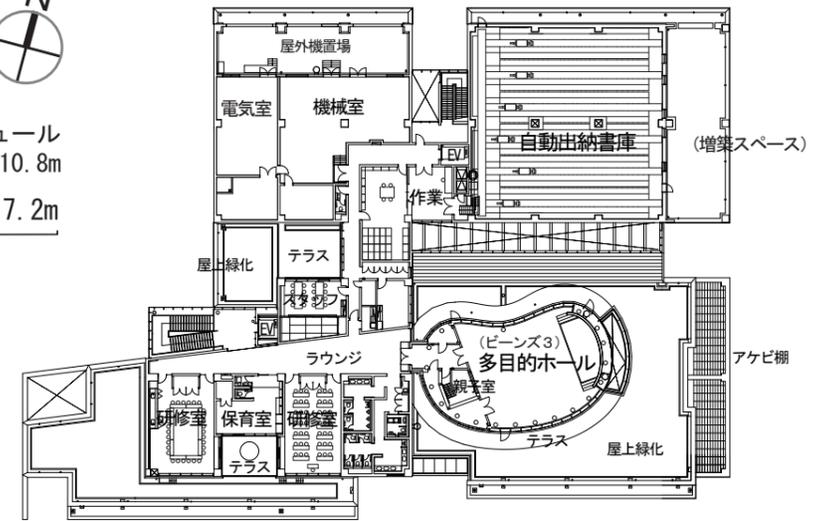
1. 既存樹木の保存を前提にした配置計画
2. かつて古信濃川で遊んだ小学生たちの記憶 → ふれあいを促す機能を3つの「ビーンズ」にまとめ、水のイメージで表現

B. 住宅地にあって

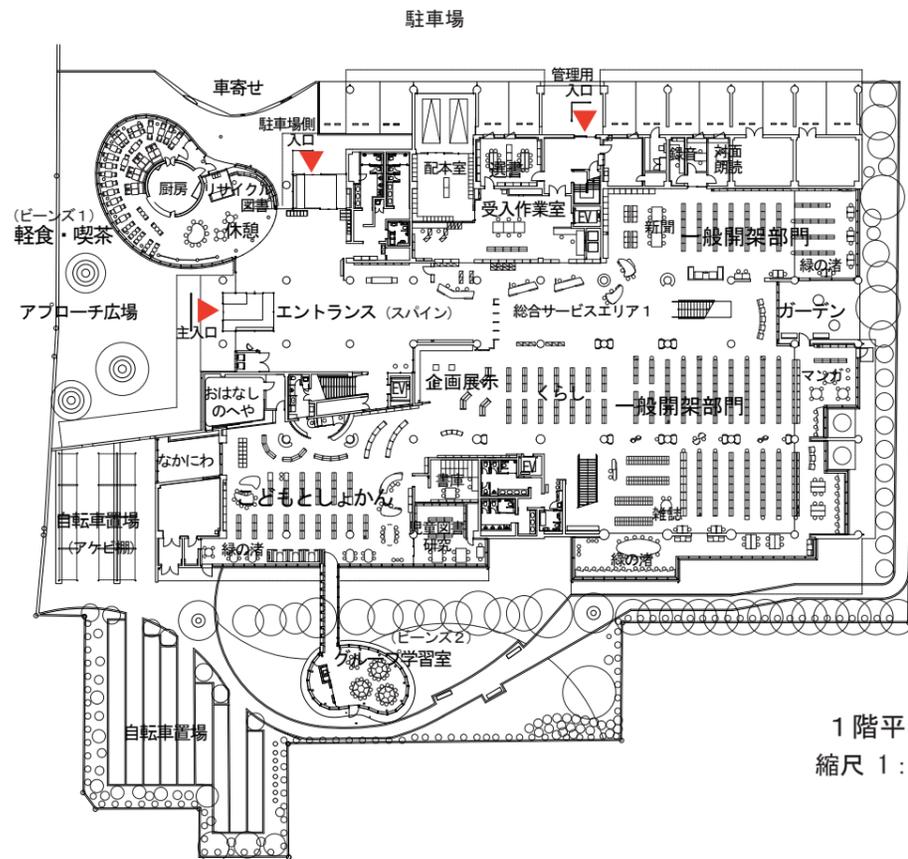


1. 緑の雰囲気が続くように、スパイン(背骨空間)を中心軸に
2. 巨大に見せない①~③の工夫で、ブレイクダウンする

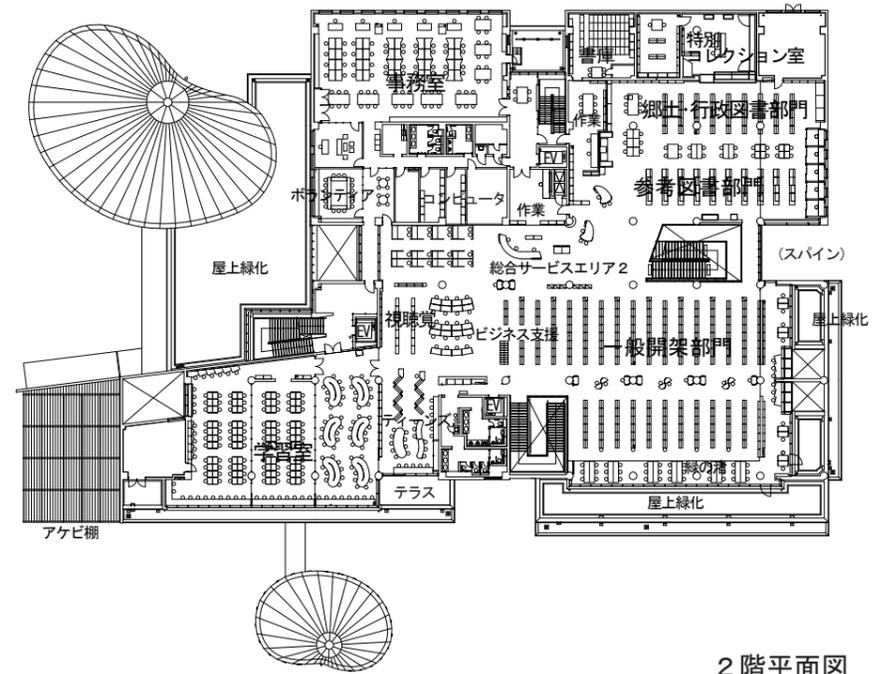
<建築構成コンセプト>



3階平面図
縮尺 1 : 800



1階平面図
縮尺 1 : 800



2階平面図
縮尺 1 : 800

<各階平面図>

3. 外観および内観写真



正面外観：中央に見えるエントランスの奥に、この建築の中心軸「スパイン」が続く



「スパイン（背骨空間）」を横からみる。手前の新聞コーナーから、スパインの向こうに開架部門、雑誌コーナー、さらに南の窓辺の閲覧スペース「緑の渚」をみる。後述のように、「スパイン（背骨空間）」には手がかり空間としての視認性を持たせ、さまざまな分野の書架群を歩き回るうちに自分の居場所がわからなくなる現象を抑える。



エントランスホールから開架部門へと誘導する空間「スパイン」



「スパイン」突当りのガーデンより振り返る



35万点の開架部門は広い。利用者が迷わず、求める資料や情報を得るためには、まずは館内構成の把握しやすさが求められる

上：そこで、建築を貫く中心軸「スパイン」を、エントランスホールから突当りのガーデンまで通し、他のスペースと天井のデザインを変えている。開架部門のかなりの部分から、この空間が認識できるので、自分の居場所がわかりやすい。また、この「スパイン」に利用者と図書館員との接点となる総合サービスエリアをまとめ、空間と機能の中心性を整合させている。大規模図書館だからこそその建築手法である



中：書架群は中央部に中置きとし、単純に同じ向きに並べて排架に柔軟性を与えつつ、探しやすくさせている。「スパイン」を背骨に例えると、書架群はあばら骨のように、直交して列を成す。その書架群の間に「スパイン」と平行して検索デスクを置いている。つまりどの書架の間からも「スパイン」や検索デスクの存在がわかるということ



下：書架群を中央部におくのは、窓側は褪色が激しいからでもある。逆に、人にとっては快適な空間なので「緑の渚」と名付け、さまざまなタイプのデスクと椅子を多く配している。外の緑はかつての小学校の記憶を継承するヒマラヤスギ。南面であるが庇とあいまって、ブラインドを降ろす必要はなく、明るさと景観を享受できる

6. ほんぽーと 新潟市立中央図書館 人気スポットの検証— 1 子どものためのスペース



「こどもとしゃかん」入り口から奥をみる



サービスデスクに隣接した検索デスク、OPAC2台・インターネット用2台。他にもOPAC2台・インターネット用1台



グループ学習室にてワークショップ『さがしてみよう としょかんのほん』



2階ティーンズ。学習室、視聴覚、インターネット検索コーナーに隣接している

おはなしのへや
扉を閉めずに運営することもある

グループ学習室から見た開架スペース



渡り廊下からみたグループ学習室

■基本計画

1) 新潟市全域の児童サービスの拠点として

「子どもの生きる力を育む“こどもとしゃかん”」

子どもたちが本の楽しさに出会い、自ら考え、学ぶ力を育むことができるよう児童図書 of 充実を図る。また、学校や保育園等と連携することにより子どもたちの読書環境の整備を推進する。

(児童図書32,000点/児童図書研究書8,000点/児童図書閉架(団体複本等)5,000点 計45,000点)

2) あわせて、ティーンズへのサービスも重視

「青少年にとって魅力のある図書館」

中学生から高校生という多感な世代に、本や音楽、映像などの資料を提供するとともに、学習や出会いの場を整備する。(ティーンズ5,000点)

■設計提案→議論→結論

1) 「グループ学習室」(小学生対象)を離れ屋として提案

→死角にならないように →ガラススクリーンにして見通せる(手摺ガード付)

2) 「おはなしのへや」「子どもトイレ・授乳室」を北側に「グループ学習室」を南側に。

本の流れは、北から「絵本・ものがたり・ちしき」として、年齢層に応じたゾーニング

→低年齢児のゾーンが暗くならないように →「なかにわ」を設置

3) 「ティーンズ」は「こどもとしゃかん」と「一般書や学習室など」どちらに近接させるか

→一般書・視聴覚へ近づきやすさ、学習室利用のしやすさを重視 →2階に設置

4) 「こどもとしゃかん」と「大人利用エリア」との関係性・配置の難しさ

=「相互利用のしやすさ」と「騒音クレームを避ける」ことの矛盾

→付かず離れずの関係とする

→①貸出確認ゲートを入ってすぐに動線分岐 ②中間に展示コーナー(大人も子どもも楽しめるテーマ設定) ③新聞コーナーを子どもの動線上から外す など

■開館2年を経て(M=山下、N=柳瀬)

1) 「おはなしのへや」は職員やボランティアによる絵本の読み聞かせやわらべうた等の定例会のほか、保育園・幼稚園のクラス利用や乳幼児連れの親子など、利用頻度が高い(M)

2) 「グループ学習室」は机の配置を変えることで、学校の施設見学や調べ学習、図書館の事業等に対応できて便利(M)

3) 表紙見せ展示ができる書架や展示棚の利用で、利用者に手渡したい本の紹介ができる(M)

4) 今年度「(仮称)新潟市子ども読書活動推進計画」を策定予定。来年度からの実施に当たり、全市立図書館と学校図書館の児童サービスの拠点として、児童図書研究室の活用が図れるように整備を行う(M)

5) 年齢と用途に応じたゾーニングを上手に活用した運用で、市民の評価を勝ち得ているように見受けられる(N)



6. ほんぽーと 新潟市立中央図書館 人気スポットの検証ー 2

窓辺を中心とした開架部門の座席群



南窓側、ブラインドを降ろす必要なく緑が楽しめる



窓際のソファと、中庭のテーブルのある椅子



東窓側①マンガコーナー



東窓側②カウンターデスクとキャレルデスク



東窓側③ソファ



東窓側④中庭に面したソファ



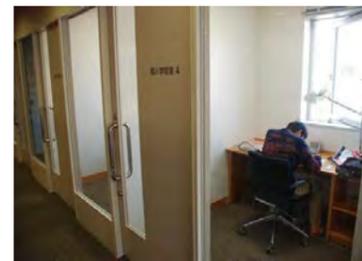
2階東窓側のカウンターデスク



大テーブル



新聞コーナー



個人学習室



書架の近くの座席(左: 1人用椅子、中: 「こどもとしゃかん」近くのベンチ、右: 階段下スペースに1人用ベンチ)



■基本計画

- 1) だれもが気軽に使える利用しやすい図書館
「立ち寄り型」から「滞在型」へ
市民の多様な利用目的に対応した閲覧スペース

■設計提案→議論→結論

- 1) 35万点開架「書架群」は排架のフレキシビリティを高めるため、また退色の激しい窓際を避けるため、中央部にまとめる。逆に「人」にとって窓際は快適なので、読書・閲覧スペースとする。

(※設計時点では「緑の渚」と名付けていた。それは往々にしてブラインドを降ろしたままになりがち窓廻りに、直射光を避ける工夫を施し、外の緑がいつでも見えて落ち着ける環境を目指す宣言であった。)

→利用者が使いやすいように多様なデスク・座席を用意する。

- ①窓際にカウンターデスク(雁行型) ②キャレルデスク(1人用) ③閲覧デスク(左右の仕切りの有無にバリエーションあり) ④ソファ ⑤大テーブル ⑥スツール ⑦個人学習室など多様。

→椅子は長時間利用を考慮し、汚れの恐れはあるものの布張りを基本とした。→ショールーム行脚、サンプルを取り寄せ、座りやすさ比較を行い決定した。

※右写真は開架部門の主な椅子。上より①岡田オリジナル新潟仕様 ②パルム(イタリア 合成樹脂) ③ゴルカ(スペイン 布張り) ④カティファ(イタリア 肘付き布張り) ⑤モティオワーク(デンマーク 合成樹脂) ⑥セブンチェア(デンマーク 木地塗装) ⑦同(フロント布張り) ⑧MOパレードチェア(デンマーク 木製布張り) ⑨MOパートアウトチェア(デンマーク 木製布張り) ⑩同スツール(木製布張り)

■開館2年を経て (M=山下、N=柳瀬)

- 1) 座席の使われ方を見ると、必要資料の近くを利用するだけでなく、自分の好きな空間や机・椅子の形状で選んでいることも窺える。各自が好みの場所を持ち、ゆっくり滞在して利用するスタイルが可能な座席数と多様性がある (M)
- 2) 持ち込みパソコン利用できる場所を、学習室の2/3と個人学習室に限定して開館したが、徐々に利用が増えている。開架部門の座席にも将来可能なように整備していたことは正解だったと思う (M)
- 3) ヨーロッパ製で定評のある、座りやすく耐久性のある椅子が揃った。長い期間使える質の高さ、国内代理店メンテナンス体制の維持など、すぐに廃番になりやすい国産に比較し、賢明な選択であったと考える (N)



6. ほんぽーと 新潟市立中央図書館 人気スポットの検証— 3

学習室 (さらなるハイブリッド利用を推進する効果にも注目)



上左写真:「ティーンズ」に隣接した学習室C、右奥が学習室B / 上右写真: 学習室Bさらに奥が学習室A



学習室C: 椅子を「ティーンズ」と同じにして連続性を強調、中高生の利用を促している

開架部門は、印刷媒体だけでなく、①インターネットが使える20台の端末がある情報コーナー ②6台の端末があるオンラインDBコーナー ③持ち込みPCが使用できる座席群(インターネット接続可) ④利用者用検索端末の一部はインターネットに接続し新潟市以外の情報も見ることができる等、デジタル情報も提供している。さらに開架部門のほとんどのデスクは今後③に変更可能な設備対応がある。自習利用の多くを吸収している「学習室」の存在も、さらなるハイブリッド利用を推進する。



書架群に沿って並ぶ閲覧席



左: 一般開架部門の検索用デスク / 右: どの書架の間からもみえるので、使いやすい



上: インターネット検索コーナー。レファレンスに近接
下: 参考図書・郷土資料部門の書架群に沿ったデスク。持込のパソコンに直接入力する姿も増えてきた

■基本計画

1) 市民ニーズに対応して、200席の「学習室・社会人室」を盛り込む

近隣の生涯学習施設は、中高生を中心とした若い世代の学習室ニーズが高く、所定場所から溢れている現実があったので、新しい図書館が完成した時にはその需要が押し寄せることが予測された。その一方で、社会人からも落ち着いて学習できる席の要望が多く寄せられていた。双方のニーズに応える席数として200席を設定し、『基本計画書』に明記した。

■設計提案→議論→結論

1) 1階は限りあるため「学習室」は2階に設置

→開架部門が閉館した後も「学習室」の利用が可能であるように。

→2ヶ所の入口設置。①通常の開架部門からの入口 ②1階のエントランスから貸出確認ゲートを経由しない入口。どちらか1ヶ所を利用する前提。開架部門閉館後は②を使う。

2) 200席のレイアウト検討

ニーズに関する2つの違いに配慮=①利用者層の違い ②騒音に対する許容度の違い

→3室に分ける。ただしガラススクリーンで相互に見通しをよくし、条件の違う3室が用意されていることを強調する。ゆったりと187席に。

学習室C (67席): 隣接するティーンズと同じ椅子にして連続感=中高生が入りやすい
雰囲気重視。大机でグループ学習(小声での会話)を許容しあう

学習室B (52席): Aに隣接。ガラススクリーンで声を遮断。パソコン持込可で、キーボードの音を許容しあう

学習室A (68席): Bに隣接、一番奥。静粛を求める利用者用。将来的にはパソコン持込も可能なようにコンセント設置

3) 開架部門の座席群は、本来は図書館の提供する資料や情報を使った学習の場であるべきだが、持込資料の自習の場としての利用はどの図書館でも少なからず見受けられる。

→後者の利用を学習室に誘導することで、開架部門の座席群での図書館資料や情報を使った学習利用を促す。

■開館2年を経て (M=山下、N=柳瀬)

1) 基本計画当初は、年代で区分した「学習室・社会人室」を設置となっていたが、年代でなく、用途によって区分することとし「学習室」という名称になった。ティーンズコーナーに隣接した学習室Cは高校生が多いが、AとBでは、中高生と社会人が一緒に利用している。中高生にとって社会人が学ぶ姿を見ることは励みになると思う (M)

2) 高校生のテスト期間中の土日は、学習室と閲覧席が満席になり、社会人から苦情が多く寄せられる。開館1年位までは、閲覧席での自習も排除しないうえに、閲覧席の中に一部「読書・自習席」を設け、それ以外の席では自習利用を断るようになった (M)

3) 開架部門の座席群がいつも満席状態では、図書館の提供する資料や情報を使った学習は促進されない。さらに、印刷媒体とデジタル情報の双方から学ぶハイブリッド利用を促すためにも、書架近接のデスクが適度に空いている必要がある。よって、ハイブリッド利用の時代の中規模以上の市民図書館には「学習室」は必須といえるのではないかと。そう予見できる利用状況が観察される。(N)

6. ほんぽーと 新潟市立中央図書館 人気スポットの検証— 4

会話のある「空間」、語りかける「モノ」



<エントランスホール、開架部門>
声を掛けたくなるコンシェルジュ



<レファレンス>
緊張を和らげる勾玉形デスク

<こどもとしゃかん>
図書館員が意識して会話しやすい雰囲気をつくっている



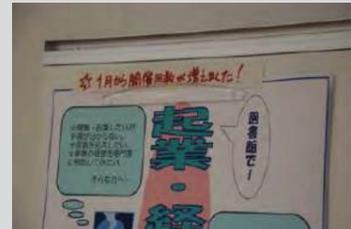
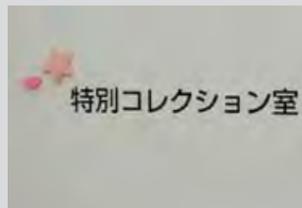
一般開架部門の書架、目の高さに平置き台 / ティーンズの書架も語りかける (ともにメッセージも添えている)



こどもとしゃかんと一般開架の間にある展示コーナー。システムパーツを用意 (可動棚・ケース、展示壁、展示ボックス)



左上：階段踊り場の凹みを活用した展示台 / 右上：ワゴン型展示台 / 左下：室名の脇にさりげなく桜の花びらを張る / 中下：自前のポスターに手書きのメッセージを添えて温かみを演出 / 右下：郷土資料用書架にて「市民活動の記録」を展示



■基本計画

- 1) 市民の生涯学習を支え、知的活力を高めるベーシックな図書館
- 2) 市民とともに成長し、市民の誇りとなる図書館
- 3) 市民のさまざまな疑問や調査研究に応える図書館

中央図書館として、新潟市全体の図書館サービスを向上させる中核的使命を担っている。同時に、豊富な開架資料 (35万点) とインターネットやオンラインDBを利用したレファレンスの充実、市民ニーズを踏まえてのテーマ展示や本の紹介など、来館してくる市民の満足度を高める図書館でありたい。

■設計提案→議論→結論

- 1) 大規模図書館において、人の温もりを感じさせる図書館をどう創るか
→ソフトを支えるハードのあり方について、利用者が空間把握しやすく、図書館員の姿が好ましくみえる図書館が望まれる
→利用者と図書館員の中心的接点となる総合サービスエリア (案内、登録、貸出、返却、レファレンス) を、この建築の軸空間である「スパイン」に集約させる。エントランスホールにつづく総合サービスエリアのある「スパイン」を、図書館のどこにいても認識しやすいように特徴づける。それにより、図書館員の存在をよりみじかに感じさせる。
- 2) 調べもの支援の中心的な場であるレファレンスデスクの使いやすさの徹底追及
→利用者、図書館員双方にとって会話しやすい勾玉形デスクの開発
- 3) 「人」による直接的な語りかけに加え、「モノ」を通じた会話しやすいように
→目的に応じ、使い込める仕掛けを用意。掲示する場所を特定し、所構わず張り出さない。
 - ①家具のシステム化。どの書架にも展示台がセットできるなど
 - ②一般開架部門とこどもとしゃかんと間に展示コーナー。多様な企画に対応できるようにシステムパーツを用意=展示壁、可変棚 (書棚のように水平、平置用に傾斜のどちらにもセット可能)、棚にセットできる透明ケース、独立した展示ボックス……
 - ③場所に応じた特徴的な展示台を用意 (階段踊り場、ワゴン展示架など)
 - ④掲示板設置場所を、効果的な位置のみに限定する

■開館2年を経て (M=山下、N=柳瀬)

- 1) 中央図書館は機能ごとに8カウンターに分かれ、その内の貸出・返却などのカウンターを民間に委託している。利用者と接することが少なくなったが、その分をカバーするために様々な工夫をしてきた。事業やボランティア活動を通じた市民との関わりを大切に、掲示物や展示にも人のぬくもりが感じられるように配慮している (M)
- 2) 展示コーナーは規模が大きいため、課を超えたプロジェクトにより運営している。話し合うことで考え方の違いを活かしていくことができる。また、効率的な展示物の作成もできるようになってきた (M)
- 3) 広いエントランスを利用して関係課や機関による展示の回数が増えている。一日あたり2,300人の来館者は、展示する側にとっても魅力がある。また、展示に併せて、3階の多目的ホールや研修室での講演会や講座を行い、その内容を深めることができる (M)
- 4) 利用者が直接来館したくなる魅力が向上してきていると思われる。「人」によるサービス、「モノ」の使いこなし方の両面において、図書館は進化することを実感できる (N)

6. ほんぽーと 新潟市立中央図書館 人気スポットの検証— 5

飲食できるスペース



休憩コーナーから奥に、テイクアウトコーナー、レストランがある



レストラン内部



天気の良い日は、エントランス前広場のベンチで飲食する若者も目立つ



休憩コーナーでの家族



休憩コーナー入口



レストラン入口



パンなどのテイクアウトコーナー

■基本計画

1) だれもが気軽に使える利用しやすい図書館

「立寄り型」から「滞在型」へ

長時間利用に伴い、飲食できるスペースが求められる。

住宅地のため近隣の飲食店まで距離がある。

■設計提案→議論→結論

1) 市民の年齢層の幅広さや多様なニーズに応えるため、軽食喫茶（レストラン）部分と、持込の飲食が可能な休憩コーナーに分ける。

ただし、市内の公共文化・教育施設で撤退するテナントが多い（自動販売機のみスペース提供も検討）

→エントランスホールに隣接する「喫茶ビーンズ（豆型の付属屋）」を飲食スペースとして整備する。そこに軽食喫茶（レストラン）と休憩コーナーを隣接させ、弾力的な運用を可能にしておく。

→外からもその存在が良く分かるようにガラス張りとして、賑わいを感じさせる地域のコミュニケーションの場にするとともに、集客力向上につなげる

→工事段階で厨房設備の施工に間に合うようにテナント募集。そのメニュー構成にふさわしい設備に変更し、テナントのモチベーション維持を図る（通常は厨房機器をセット後のテナント募集が多く、メニュー構成に制約が出るのが問題視されていた）

→市内で味と質に実績のあるテナントに決定。本体工事とテナント（インテリア）工事の整合は思惑通りに調整できた。

軽食喫茶（レストラン）40席、 休憩コーナー25席

■開館2年を経て（M=山下、N=柳瀬）

1) 入館者の多くなる土日や高校生のテスト期間は休憩コーナーから人があふれることもあるが、その場で長時間話しこんでいる学生には声をかけるなどして対応。座席数を増やしてほしいという利用者からの要望もあり、20席から25席に椅子を増やした（M）

2) 利用の少ない平日には、飲み物を片手に勉強や読書をしている利用者の姿もある（M）

3) レストランのテイクアウトコーナーでは、夏季には図書館利用を終えた親子連れがアイスクリームを買う姿がよく見られた（M）

4) レストランと共催で、絵本の読み聞かせを行い、登場する人物のパン作りが行われ、好評だった（M）

5) レストランが客単価の高さにより落ち着いた回転数となっている分、休憩コーナーの高密度利用が気になるものの、市民の利用の仕方が定着してきているように思われる。外部広場のベンチも天気の良い時には飲食の場となり、十分とはいえないもののすみ分けされている（N）



早朝、図書館内のレストランで焼いているパン

従来型レファレンスデスクでの「会話」は、緊張を強いることが多いのではないかと。その問題意識から始まった。

図書館を使いこなす利用者にとって欠かせないレファレンス。しかし声を掛けたものの、知りたい核心になかなか触れない利用者は意外に多いという。レファレンス・インタビューのノウハウが重視される所以であるが、単刀直入に何を調べたいのか言い出せない心理に、建築環境は影響していないだろうか。

その問題意識から、レファレンスの基本行為である「会話」がもっと気軽に進むレファレンスデスクを開発すべく、以下の文献の実証実験を行った。

<参考>人間の持つ「距離」の感覚について

利用者と図書館員の心理に、お互いの「距離」は大きな影響力をもつ。その理論的参考として、

『かくれた次元』（エドワード・ホール著）※1を以下に要約
 エドワード・ホールは、人間が自分の周りにパーソナリティの延長として持っている「距離帯」を、以下の4つに分類、さらにそれぞれ遠近の相に2分している。この理論は民族、生まれ育った文化的背景により差異はあるが、おおよそ日本人にも当てはまるとされる。
 「レファレンス・スペース」における心理状態を考える上での重要な問題点は、下記にまとめた「**个体距離・遠方相**」と「**社会距離・近接相**」の間に潜んでいる。

I. 密接距離

近接相：6インチ以下（約15cm以下）
 遠方相：6～8インチ（約15～45cm）
 顔の一部のみ強調して見える。低いレベルの会話、ささやき…相手の体温、息の音、においなどを感じる。

II. 个体距離

自分と他者とを恒常的に隔てる距離。親密度やお互いの感情により、その距離は変化する。
 近接相：1.5～2.5フィート（約45～75cm）
 相手を抱いたりつかまえたりできる。

遠方相：2.5～4フィート（約75～120cm）
 片方が手を伸ばしても届かなくなる距離から、両方が腕を伸ばせば指が触れ合う距離までの範囲（身体的影響力の限界）。相手の表情は細かなところまではっきりと見て取れる。皮膚の細かい状態、白髪、眼元に現れた眠気、小じわ、衣服の汚れ…。体温は知覚されない。息のにおいはわかることもある。この距離は個人的な関心事や関係を論議するのに適している。

III. 社会距離

たやすく他人に触れられなくなる距離。顔の細かいディテールも明確でなくなる。
 近接相：4～7フィート（約120～210cm）
 個人的でない用件はこの距離で行われる。一緒に働く人々は近い方の社会距離を用いる傾向がある。
 遠方相：7～12フィート（約210～360cm）
 形式的な社交上の対話距離。

IV. 公衆距離

個人的関わりの範囲を超える。12フィート以上離れると、脅かされた時、逃げるか防げる割合がぐっと高くなる。
 近接相：12～25フィート（約360～760cm）
 遠方相：25フィート以上（約760cm以上）

※1『かくれた次元』（エドワード・ホール著 日高敏隆、佐藤信行訳 みすず書房）



<実験写真-1>対面120cm:
 「社会距離」と「个体距離」の境界。初対面の場合、これ以上近づくと緊張が強まる



<実験写真-2>対面75cm:
 「个体距離」の遠方相と近接相の境界。テーブルの幅は標準的レファレンスデスクと同じ80cm



<実験写真-3>対面90～100cm:
 机上のパソコンを操作したり、声を小さくしたい心理が強いときには近づいてしまう。つまり、レファレンスは、「社会距離」に留まらず、「个体距離」に突入してしまう宿命を負っている



<実験写真-4>同じ対面90～100cm:
 90°斜め向きの位置関係になると、緊張感が格段に和らぎ、話しやすくなる

同じ対面距離の場合、180°対峙よりも、90°斜めに向き合う方が話しやすい。その関係に座れる「勾玉型」レファレンスデスクを開発。



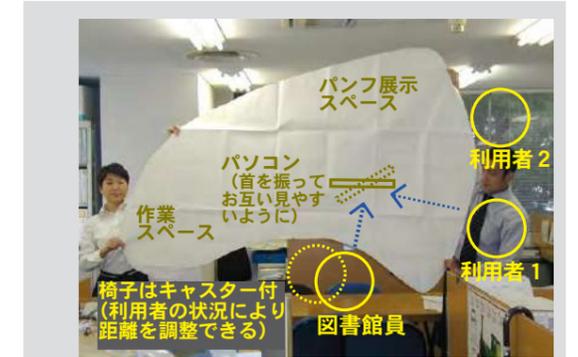
<参考>マルメ市図書館（スウェーデン）おむすび型デスク（横並び型）:
 利用者・図書館員ともに、検索画面をみやすい。ただし、体が触れあう恐れがあり、スキンシップの習慣の違う日本にこのまま導入するのは難しい



<参考>リハビリテーション病院調査:
 「体」とともに「心」の回復を支援するセラピスト（作業療法士や言語療法士）は、患者と90°斜めに向き合う位置関係で接している。緊張を和らげる効果を、すでに実証しているといえよう



完成写真（上）とレファレンス中の写真（下）:
 1、2階に各2台ずつ、こどもとしゃかんに1台、合計5台。
 印刷媒体とデジタル検索の両方を駆使しやすい



開発シミュレーション記録写真
 上:原寸型紙(椅子の位置など写真中に併記)
 下2点:型紙を敷いて、実際に大きさや両者やパソコンなどの位置関係と使いやすさを検証。その場で一部をカットあるいは付け足し、補正を繰り返した



レファレンス中の写真:
 同じパソコン画面をみながら説明。デスク端部の張り出しが両者の領域を明確に分け、体が触れ合うのを防止している

ワークショップ／新潟市立中央図書館＋岡田新一設計事務所／企画書作成：柳瀬

「さがしてみよう！ としょかんのほん」

■目的

- 1) グループ学習室の使い方の一例を示す。
離れ屋であること、開架室から見る・見られる関係にあることの意味を、実践を通して（子どもの成長を願う大人たち＝保護者、学校図書館および公共図書館関係者、ボランティア…が）ともに考える機会とし、さまざまな使い方を引き出すきっかけとしたい。
- 2) こどもたちに「図書館とは…」を考えるきっかけを提供する。
本が多いだけでは単なる本の倉庫。誰もが利用しやすくするためにルールが存在することを実感させる。

■日時

2007. 11. 11（日） 60分程度×2回 11：00、14：00
テーブル・席のレイアウト検討、1回目は円卓形式。2回目はスタイルを変える

■対象

小学生：15人程度／回（保護者同席可、幼稚園児が入っても可）

■ナビゲーター

図書館司書として：新潟市立中央図書館 三條、五十嵐 以下A
設計者＋利用者代表として：岡田新一設計事務所 柳瀬 以下B
サポーター5、6名 以下C

■用意するもの（人数分＋予備）

- ①こどもととしょかん「本の並びマップ」、NDC一覧表 各1枚ずつ／人 …図書館で用意
- ②目印ホルダー＝クリアケースに赤などの目立つ色を挟み込んだもの：端に「このままにしておいて。すぐにお友だちが使うものだから」など縦書きしておく。大き目の本の中で埋没しない大きさ＝A4サイズを横におく …図書館で用意
- ③こどもととしょかん「本の並びマップ」「NDC一覧」パネル2枚 …設計事務所で用意
- ④アンケート用紙（＋鉛筆、消しゴム） …図書館で用意

■ストーリー（B：司会進行）

- 1) あいさつ（館長）
- 2) B：大まかな進め方説明。「秋」が出ている本（言葉でも、写真でも、イラストでも…）をさがしてみよう問題提起。その前に図書館にはどのような種類の本があるのか、それらがどのように並んでいるか、教えていただくことにしましょう、とAを紹介する。
- 3) A：2枚のパネルと手元に配布した資料をもとに「本の並び方」説明。ヒントを与える。
- 4) 参加者全員：開架室で探す。サポーターは迷っている子にアドバイスする。決まったら、その本があったところに目印ホルダーを挟み、本をもって、グループ学習室に戻る。
- 5) 参加者全員：ひとりずつ、自分が選んだ本をごく簡単に紹介する。
①本の題名 ②どのページに登場するか、開いてみんなに見せる
※ここがポイント。同じ「秋」でも、人によって違う分野の本を持ってくるはず。（4類「植物図鑑など」、5類「料理」、6類「産業」、7類「デザイン・工作・写真集など」、9類「ものがたり」、およびえほん、紙芝居…）
（Aは、補足説明用として気づきにくい分野の本を前もって用意しておく。）
- 6) A：ひとくちに「秋」といっても、さまざまな分野の本があることを、子どもたちが選んだ本及びあらかじめ用意しておいた本で改めて説明する。例を取り上げ、マップを用いてどのあたりに並んでいた本か、クイズ形式でたずねることも考えられる。
- 7) B：①「それでは、本を元に戻しましょう」 段取り説明。
ただし、自分ではなく、他の人の本を。時計回りに手渡しするゲームで、自分に回ってきた本を戻すことにする。
- 8) 3人一組となり、チームごとにA、B、Cおよび保護者がつく。開架室に行き、「本の並びマップ」と目印ホルダーを手がかりに、その本のあった場所をさがす。大人が「正解」であることを確認してから、子どもたちが目印ホルダーを抜く。終わったチームからグループ学習室に戻って着席。
- 9) アンケート用紙に記入してもらう。
- 10) B：まとめ。＋この図書館の建築のこと（なぜ離れ屋としたか）を少し説明。のち解散—。

当日の記録写真(午後の部より)：

子どもの成長を願う大人たちも参加した。図書館員に加え、保護者・絵本作家・学校図書館司書・ボランティア・設計事務所



上3点／開架スペースで「秋」に関する本をさがす。暖かくサポートする大人たち



自分が探してきた本のどこに「秋」があるか、説明する子どもたち
上／『シートン動物記』、冬眠する前の熊が食べ物をあさる背景に、「秋」があると語る男の子

下／『野菜の本』で、秋ナスを紹介



左／「ナス」を選んだ子は、たまたま3人いた。植物(4類・動植物)の他に、料理(5類・くらし)、ナスの絵を描く本(7類・芸術)が集まった。すかさず、図書館員が「同じナスでも、書いてある内容によって、分類が別れること、その分類ごとに並べた方が探しやすい」と解説



上／他の人が借りてきた本を、もと置いてあった場所を探し出し、返す(ゲーム感覚)。抜いた所に挟んでいた赤いクリアケースが目印になる
左／終了後、感想をかく。「これで図書館を使いこなせる」「明日も来たい」「友達に教えたい」など、意欲的な回答が目立った



外観

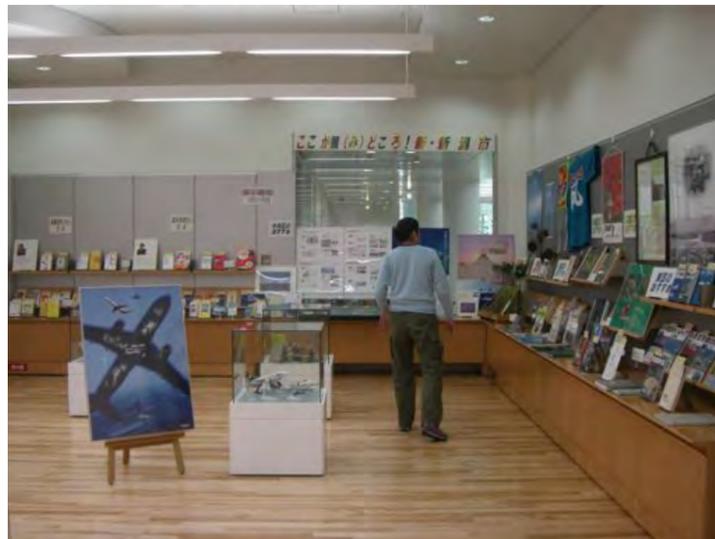


緑の渚（窓側・読書スペース）

新潟市立中央図書館：

一般書と児童書の中に、L型の展示スペースがある。

図書館員と市民が協同して、学習成果の発表や展示・広報を行なう場として、本に限らず多様な（大きさのマチマチな）物品のディスプレイが想定された。よって、いくつかのパーツを自由に組み合わせ、場の設定ができるようにシステム化した。



07/10/19撮影 新「新潟市 観(み)どころ紹介



07/11/17撮影 新「新潟市 味(み)どころ紹介



可動展示ケース

パーツC：アクリル製ケース（Aにセット、着脱可能）

パーツD：展示台（一般書架用を転用）

戸棚：パーツなど展示具、小物類収納

パーツA：棚板（一般書架と互換性有）

パーツB：展示台（Aを逆さに取り付け）



ある日の開架スペース（語りかける展示・掲示）09/3/13撮影



高書架：目の高さの書棚に、アピール効果の高い平置展示台を置いている。大規模な開架スペースで未だ蔵書数が少ない段階において、1連分の長さの展示台は「本の魅力を醸し出しつつ空きを埋める」効果が高い



高書架：平置展示台は1連分の長さのタイプと、1冊用のタイプがある。それをメッセージ掛けに活用している（当初、想定していなかった活用の仕方）



ティーンズ書架：このスペースのみ雁行型として書架そのものに場の特性を語らせている。角部に透明アクリル製の平置展示台が付いている



ティーンズ書架：角部の展示台ばかりでなく、一般書架部分にもメッセージや本の表紙をみせ、楽しさと賑わいを演出している



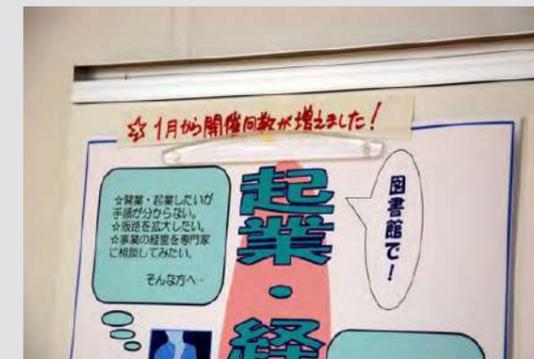
ワゴン型展示台：こどもとしゃかんで、季節に応じたテーマ展示を行っている

コーナー表示サインに、ときおり季節の花を模した折り紙が添えてあるのも、細やかな気配り

特別コレクション室



階段踊り場にある展示台。館内の隅々まで、利用者サービスに徹しているの、利用者の評価は高い



掲示板(部分)：パソコン作成のポスターに、手書きのコメントを添えてあるのも手づくりの温かみを感じる



掲示板(部分)：フリースペースにあるボランティア用（市民から市民への呼びかけ）

4年に1度出版される『年報 子ども図書館・2011』より抜粋
／ 稲垣房子（奈良大学教授）共著

14. 児童サービス面からみた新設図書館の事例

〈ほんぽーと 新潟市立中央図書館〉

公共図書館の児童サービスを建築・施設面から検証するため、ほんぽーと新潟市立中央図書館を例としたい。第26回（平成22年）日本図書館協会図書館建築賞を受賞している。

4-1. 政令指定都市新潟市の図書館

新潟市は2005年3月の13市町村広域合併により、八区の政令指定都市（人口81万人）に移行した。「新潟市立図書館ビジョン」（平成22年3月）には図書館を学びと情報の拠点とらえ、①課題解決型図書館 ②分権型図書館 ③学・社・民融合型図書館 ④パートナーシップ図書館という4つの柱を立てている。同時に「新潟市子ども読書活動推進計画」（平成22年3月）を策定している。家庭、学校、地域、保育園・幼稚園の連携協力が力強く打ち出されている。市域に分散する区ごとの図書館が旧市町村の特徴を生かしながら緩やかなネットワークを形成している。学校図書館支援センターは2008年より整備が始まり、2011年に4箇所で大規模実施となった。特に市内小中学校全校に学校司書が配置されていることは政令指定都市の中でも特筆できる。地域に密着したボランティア活動も大きな力になっている。

2009年10月1日に、ほんぽーと新潟市立中央図書館が開館した。中央図書館は18館29地区図書館（平成23年度）の中核として、35万点の大規模開架部門と45万点（自動出納書庫）を備えている。プロポーザルにより、岡田新一設計事務所が設計をした。

中央図書館の子ども図書館が独立した部屋と専任職員を配置していることでわかるように、児童サービスは重要な柱として位置づけられている。窓口業務は図書館流通センターに委託されている。図書館職員として企画運営部門でその専門性を発揮できる体制づくりに努力をしている。学校司書を含め司書の研修養成のプログラムがある。

4-2. 中央図書館の全容—図書館単独館

JR新潟駅から700mで便利なロケーションでありながら、緑の豊かな住宅街にある。新潟市立長嶺小学校の跡地を利用、旧校庭の樹木を取り込め、大型建造物（延べ床面積9,132㎡）三階建の高さを感じさせず、周辺の景観に溶け込む工夫がなされている。「ビーンズ」（古信濃川のイメージ）がデザイン上の特徴になっている。館内は全体にやわらかな外光にあふれ、視界が通る開放的な空間と閉じられて落ち着きのある空間がバランスよく配置されている。賑わってはいるが、利用者は自分の落ち着ける場所を見つけることができる。“緑の渚”と名付けられた南向きの座席では、ヒマラヤ杉の木陰を通しての読書が楽しめる。家具はヨーロッパ製品とオリジナルデザイン開発のものが、厳選されている。家具を含め内装は色彩がおさえられ、飽きのこない清潔感がある。開架冊数35万冊の魅力が堪能できる。

1階は新刊書・ポピュラーブック・文学・芸術、少し奥に新聞・文庫・新書・大型活字本障害者サービス部門。1階入口脇のこどもとしゃかんの独立性は高い。2階はビジネス支援を含めての主題別資料、参考図書・郷土資料、特別コレクション（会津八一、坂口安吾、吉屋暢子等）等の展示と資料が揃い、本格的なレファレンスに応えられる資料群が並んでいる。調査・相談は1階2階に特別仕様（勾玉形）の専用カウンターを設けている。人気は1階入口の“休憩コーナー”と“軽食・喫茶”がデザイン的にも美しいシンボルの“ビーンズ”型になっている。長時間滞在を意識し、休憩コーナーでは自由な飲食ができる。図書館友の会の掲示版やサイクルブックのコーナーが眼に入る。児童に関わるサービスゾーンは1階“こどもとしゃかん”、2階の“ティーンズコーナー”と“学習室”3室と“ボランティア活動室”。3階には親子室付き“多目的ホール”と“研修室”2室と“保育室”がそなえられている。さらに1階東奥には“マンガコーナー”があり、新潟ゆかりの漫画作家（赤塚不二夫、水島新司、魔夜峰央、高橋留美子等）を中心に充実したコレクションを楽しめる。図書館機能を十分に検討した上で、それぞれ適切な場所に配置されている。設計段階で図書館と設計者が充分な話し合いを重ねたことが分かる建物だ。開館時間は長く、開館日も多く設定されている。

4-3. こども図書館—641㎡

正面エントランスから右手にガラス越しに、企画展示コーナーが見える。それに誘われるようにして入ると、外国語の絵本棚が眼に入る。外国語図書コーナーだ。その右奥がこども図書館だ。

0 こどもサービスデスク

サービスデスクは貸出用と相談用2つが並んでいる。相談デスクは勾玉形で、図書館員と利用者が正面から向き合うのではなく、少し斜めから圧迫感がなく対面する工夫がされている。近くに利用者（子ども）用の蔵書検索とインターネットとCD-ROM用のPC席がある。近くの壁面には読書関連の雑誌架が並ぶ。

0 こどもとしゃかん家具

可動のワゴン型展示台の季節の本が子ども達を誘っている。書架は右壁面3段書架（上部2段は面展示棚）と向かって右がカーブ付けた4段式（上部2段は面展示棚）5台。

サービスデスクに平行して、左右に2列3段と4段の書架が配置されている。書架の高さは抑えられ、書架の上部は背面棚板がなく、部屋奥まで視線が通る。本体は木製。展示台やサインベースなど付加物を金属製とするシステムデザイン。書架の棚板に切れ込みがあるので、各段の好きな個所に展示台を差し込み、その先端が棚板前面と揃う。はずれにくくもあり、整った印象の棚づくりが工夫できる。中庭を望む西奥のコーナーに紙芝居架。旧小学校の校庭を望む南側窓は大きなヒマラヤ杉の木陰を通し柔らかい光が入る。窓際の席は“緑の渚”と名付けられている。南面に3つの対面式のボックス席がある。高い半透明の亚克力板で囲まれ、家族や友人と過ごせる空間だ。カウンター側と南西奥には中学年用の楕円形（4席）の机が3台と円形机が1台。西奥に低学年用のテーブルとソファがひとつ。椅子の座面が通常子ども用より広く取っており、安定感がある。オリジナルデザインの軽量ブックトラック（2段で幅も小さい）は展示棚にもなり、使いやすそう。

0 おはなしのへやとトイレ・授乳室

北奥“おはなしのへや”は広く、フローリングなので、様々な用途に使用できる。木の座机（可動式）4台とおはなし会用木製机2台が備えてある。その横に子ども用トイレ、手洗い、授乳室が2室。トイレ・授乳室はどの角度からも目に入るので、安心感がある。

0 児童図書研究室

児童書研究室は相談カウンターの奥に独立した部屋になっている。高書架の豊富な資料と机椅子・検索用PCがあり、落ち着いて調査研究ができる。

0 グループ学習室

こども図書館から渡り廊下でつながったガラス張りの“グループ学習室”がある。全体はビーンズの形をしている。旧校庭の緑の中に包まれた美しい部屋だ。台形の机は自在に組み合わせることができ、クラス単位のグループ学習、ワークショップ等さまざまな活用できる。椅子も部屋の雰囲気に合わせて、パステル系ライトブルーだ。戸棚を開けると、流し台が用意されている。この部屋の活用で調べ学習の新しい形を提案している。

0 児童書用書庫

全館用の自動書庫の出納口とは離れているので、こども図書館用の書庫（5000冊収容）がカウンターバックに設置されている。全市への団体貸出用や調べ学習用資料、雑誌バックナンバー等が収納されている。

0 その他のポイント

カウンター前にも小展示のコーナー。新潟市出身の黒井健さんがこども図書館名誉館長だ。黒井氏デザインのカンガルー“一ぼん”がこども図書館のキャラクターになっている。成人の部屋との間に、共通性のある企画やテーマ展示コーナーなどをあてはめ、「付かず離れず」の関係で、ゾーニングされている。子どもの声がうるさいとのクレームを起こしにくく、その一方で、児童がティーンズや一般の本にも近づきやすいようにとの設計意図がある。

4-4. ボランティアルーム—36㎡ 2階

図書館の運営にボランティアの活動が果たす役割は大きい。2階にボランティアルームが設置されている。子ども読書推進にかかわる多くのグループがこの部屋を拠点に活発な活動をされている。

4-5. ティーンズルーム—76㎡/学習室3室 —378㎡ 2階

中高生をサービス対象とするティーンズルームは1階のこども図書館とは異なるコンセプトで設計されている。2階のビジネス支援コーナー、商用データベースも利用できるPC端末のコーナー、CDやDVD書架の並ぶ奥にあるティーンズの手の届くところに様々なメディアに接することができる。コーナーの入口は特別仕様の自立型のコンパクトな書架が並んでいる。亚克力の展示書架を組み合わせ、ティーンズ用の図書が配架されている。学習室壁面の雑誌架も手に取りやすいように工夫されている。机が窓側、平面、グループ机とそれぞれ選べる。

ガラス越しに機能別に3室に分かれた学習室（3室187席）が見える。中高生・大学生・社会人とそれぞれの利用者ニーズの違いに対応できるよう明確に分けられている。「自習することができます」と書かれている。開架部門が開館時にも学習室が利用できるように入口と動線が確保されている。大学生、社会人の真剣に学ぶ姿が、中高生の眼に入る。

学習室C：隣接するティーンズと同じ椅子にして連続感をもたせ、中高生が入りやすい雰囲気を重視している。グループ学習も可。学習室B：パソコン持ち込みが可能（ガラス越しにAとC室にはさまれている）学習室A：静粛を求める利用者用。パソコンや電卓は禁止。一番奥まっている。

4-6. 多目的ホール—183㎡/研修室2室+保育室—210㎡ 3階〈省略〉

4-7. まとめ

新潟市立中央図書館を事例として、児童サービスを行うにあたって必要な施設・設備を考えてみた。2007年以降新築されて図書館の中にもこれらの要件に該当するすぐれた例をみることができる。ボランティアや学校関係者との連携の中で、乳幼児期からスタートし、中高生そして、生涯学習を視野にいたすすべての利用者に愛される図書館を作り、それぞれの現場で健闘されていることに勇気を与えられる。

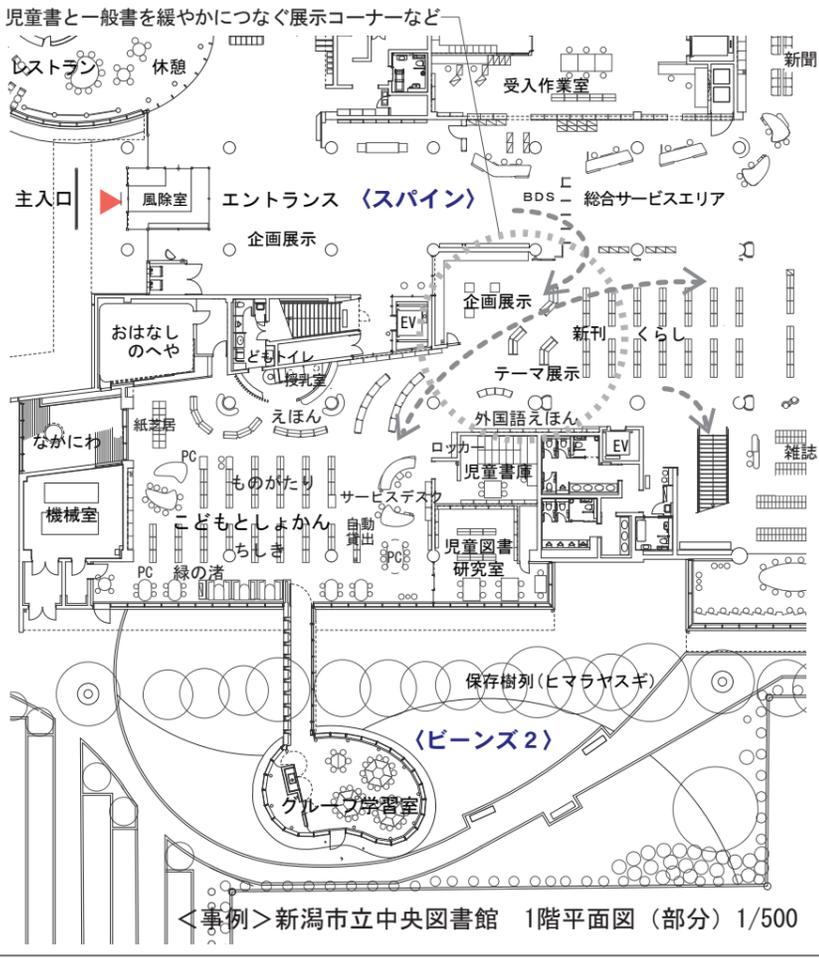
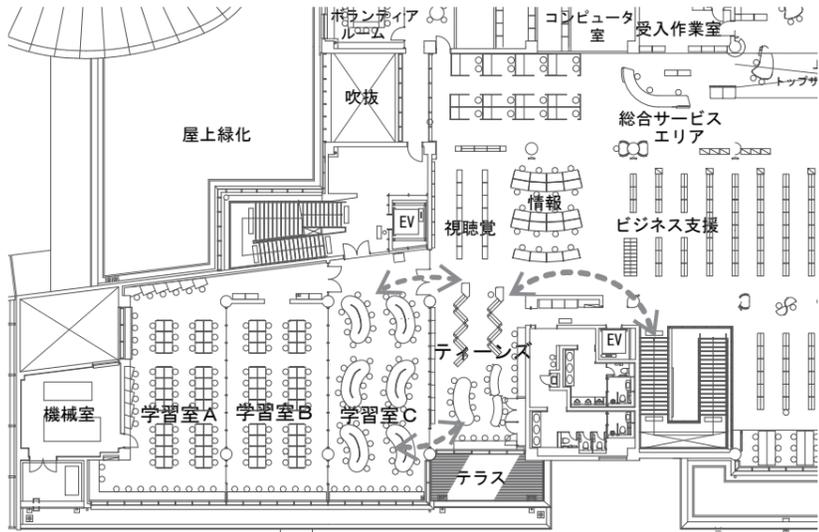
◇児童サービスのための場に係わる関係性

1) 児童書の種類と主な対象年齢層

- ①えほん（就学前）
- ②ものがたり（小学生）
- ③ちしき（～小学生）
- ④その他＝紙芝居、大型絵本、
「月刊誌(こどものとも)」やAV資料など

- ◎「おはなしのへや」「授乳室・子どもトイレ」は①えほん および サービスデスクの近くに
- ◎小学生を対象とした学びあう場「グループ学習室」も重視したい。③ちしきの近く

※ 対象年齢は便宜上のもので、利用を限定するわけではない。 →何を重視するか・その回答により計画・設計は変わる



サービスデスクから奥をみる。右から左へ「えほん」「ものがたり」「ちしき」のための書架。家具は大人利用も想定した機能性を踏まえたデザイン



サービスデスクは、貸出用と相談用の2つが並ぶ



おはなしのへや。「えほん」「紙芝居」「大型絵本」架に近接させている



「おはなしのへや」とは別に、主に小学生を対象とした「グループ学習室」がある。その用途にあわせた雰囲気、仕様設定



2階ティーンズルーム。専用書架。「情報」「視聴覚」「学習室」に隣接

我孫子市生涯学習センター

「アビスタ (我孫子市民図書館+我孫子地区公民館)」

学校を卒業した後も、より充実した人生を送るためには「学ぶ」ことが欠かせない。生涯のいつでも「何を学ぶか」は自らの意志により自由であり、自らの成長の責任は自らにあることが、これからの生涯学習社会の原則。つまりひとり一人が主役であり、個が尊重される。

その一方で、ひとりではきっかけがつかめない、続かないことも多い。核家族化の進む時代にあって、触発を受けたり切磋琢磨するような「学びあう」機会と場も、同時に強く求められている。

我孫子市生涯学習センターでは、「図書館」と「公民館」の利用者層の相違点を分析し、相乗効果を最大限引き出すような全体構成を提案した。

一般的に「図書館」は個人利用が多数を占め、市民が誰でもいつでも予約なしに自由に利用できる。一方、多様な性能を備えたスペースや設備を持つ「公民館」は、同好の団体活動や一定の属性に対応した利用が主となっており、体験の共有に持ち味がある。

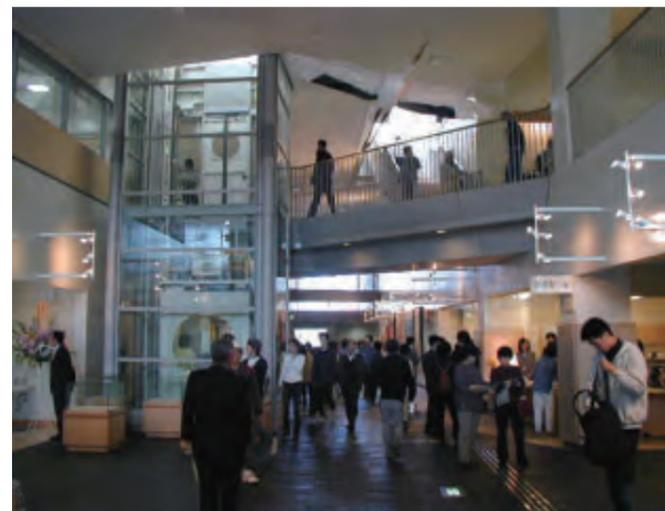
複合化にあたり、双方に共通するパブリックな性格の機能を「ストリート」を中心に結びつけ、利用者同士の触発や新しい自分発見につながりやすい学びの環境をめざした。その一方で、プライバシーにも配慮し、要所に落ち着いた空間も併せ持つように設計している。



雑誌・新聞コーナー



参考図書・地域資料コーナー



ストリート：日頃の学習成果の発表、市民同士の交流・触発の場



一般開架



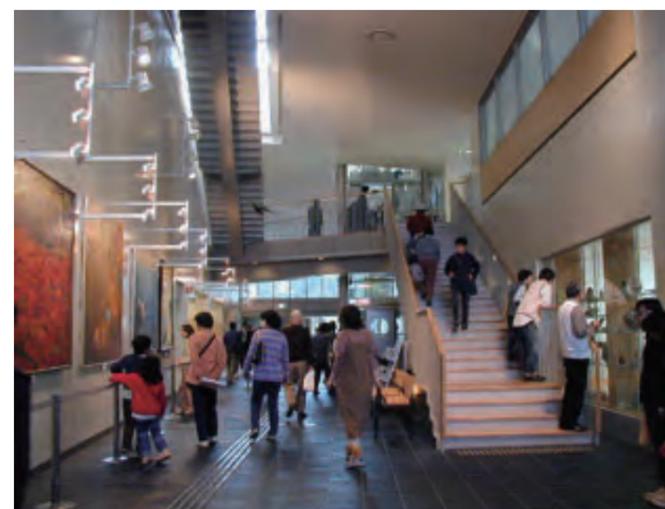
図書館デビュー：若い親たちの交流や情報交換の場としても



孫とのひととき



母から子へ：公園で遊んだ帰りに



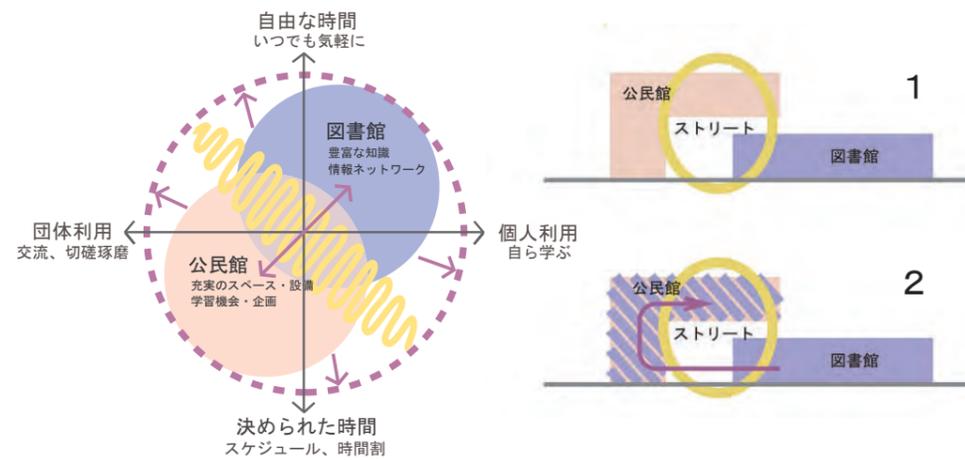
ストリート：階段の右は展示ケース越しに、工芸工作室での活動がみえる



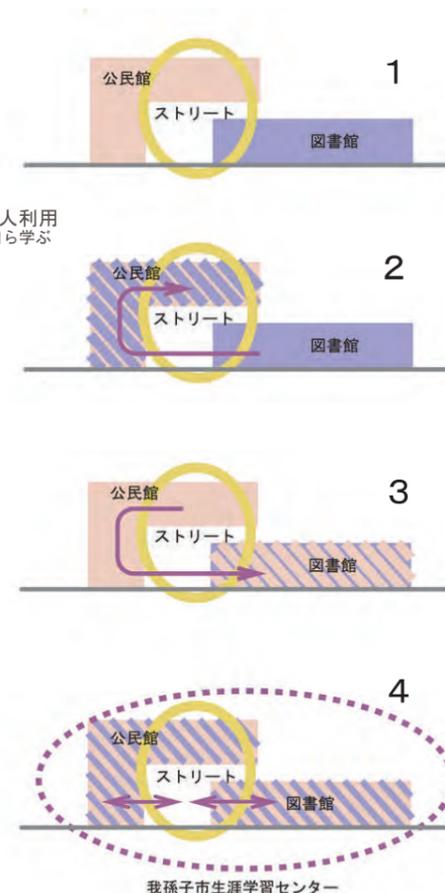
ホールの活動風景が街へと。暗幕やケースメントでの遮蔽も可



学習室前の展示コーナーとオープンスペース（飲食自由）



1. ストリートを軸に、図書館と公民館を絡ませる。利用者同士の触発を促す公開性の強い要素がストリートに顔を出す。
2. 「図書館」利用者にとって、公民館の様子もわかりやすく、実践の場や同好の仲間を見出しやすいイメージ図。
3. 「公民館」利用者にとっても、図書館が身近に感じられ、より深く学習テーマを極める利用が促進されるイメージ図。
4. 2つの機能の相乗効果が高まり、利用者同士が刺激しあい切磋琢磨する、新しい学びの場が誕生するイメージ図。



zoom up
広場

生涯学習のライブな活動軸として [ルポ] 吉田町立図書館



南側外観

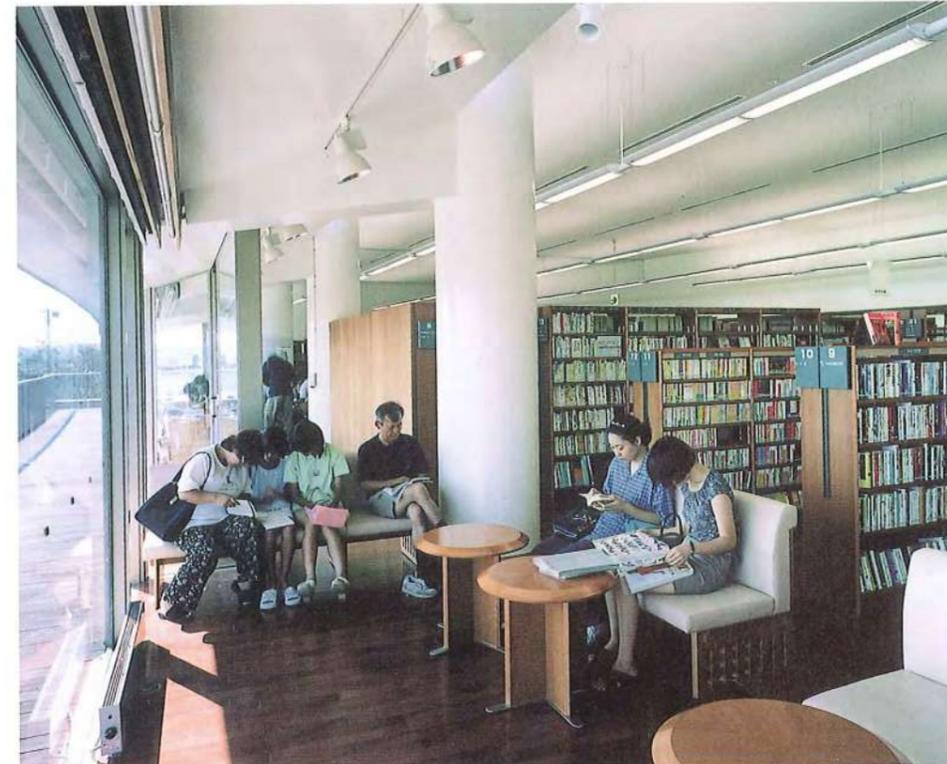


テラスに出れば川のせせらぎを聞きながら読書を楽しめる

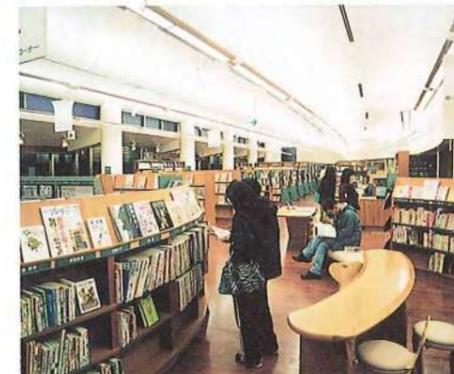
町民の強い要請により実現

吉田町立図書館は静岡県榛原郡にある人口2万7千人の町に平成11年7月に開館したばかりの施設であるが、同年11月の時点で利用登録者数が1万4千人と町民の過半数を記録し、延利用人数は2万8千人に達している。この図書館は、平成7年に行われた町づくりアンケート調査において、生涯学習の核としての図書館に寄せる期待が強く表明された結果、吉田町総合計画の一貫として事業化された。

設計はプロポーザル方式により選出された岡田新一設計事務所だが、設計者はその後町民説明会に出席し、町民の意見や要望を丁寧に吸い上げ、設計に反映されたそうである。



読者コーナー



開架閲覧室

川に語りかける図書館

敷地は町のほぼ中心に位置し、将来の都市計画道路に近く、また2級河川湯日川沿いといった好条件を備えている。外観は軒の深いだらかな数枚の勾配屋根が特徴的で、それらが落とす深い影が外観と内部空間を落ち着いたものにしていく。庭は建築面積の8倍程度あり、将来的にはいくつかのゾーンにそれぞれテーマを持たせて緑豊かに造り、敷地内全域を活かした図書館と位置付ける予定だという。

図書館は「うへの階」と「したの階」で構成される2階建てで、湯日川の堤防から川が分岐したような円弧を描くスロープが伸びて直接開架閲覧室のある「うへの階」にアプローチすることもできる。



「うへの階」から大階段を見る

この曲線軸に対して川側に図書館本体、庭側に喫茶コーナーや視聴覚ホールなどが配されている。住民の多くは「したの階」のメインエントランスから入ることになるが、ここからも緩勾配で幅2.5mの大階段が設けられているので、開架室が2階にあることは気にならない。開架閲覧室は南側の川に沿って配置されており、テラスからは川の眺めを楽しむことができる。いずれも敷地の形状、周辺環境を巧みに活かした計画といえよう。

「みち」空間を楽しむ図書館

この図書館の空間的な特徴として、土手から伸びるスロープを内部まで延長したような「交流ストリート」が挙げられる。「したの階」のエントラ



視聴覚ホール 舞台後壁は開閉可能で庭を見ることができる



喫茶コーナー



土手から伸びるスロープ



スロープから続く交流ストリート



児童室 手前の塔状の書架は職員のアイディアによるもの



児童室書架 ほこらのようなベンチを設けている



交流ストリート おおらかに湾曲した壁は展示に使用されている



イベント風景「色と遊ぼう」



設計者デザインによる屋台をイメージしたテーブル

ンスホールから「うえの階」の開架閲覧室までの2層にわたる「みち」空間がそれであり、ここを展示及び各種イベントスペースとすることで、図書室を訪れる人が通過する際にそれら展示物や人と出会うことをねらっている。一般にギャラリーのような機能は図書室とは分離されているため利用者の全てが目にするのは難しいが、この図書館では図書室の入り口が「交流ストリート」の終端にあるために来館者全てが「みち」空間に触れることになる。図書館を広い意味での「学びの場」として捉え、それを空間化している点に、図書館を数多く手掛けられてきた設計事務所の手腕を感じる。

「交流ストリート」がコミュニティの場であるのに対し、開架閲覧室には個人利用に対する配慮がうかがえる。平面形が長く伸びた形となって



配置図
0 10 20 30 40 50m

いるのは、正方形プランよりも他人の目が気になりにくく落ち着けるためだそう。川に面する読書エリアは天井が一段低くなっており、さらに各ゾーンをアルコーブ状にすることで落ち着いた空間を創出している。一般開架室の奥には児童室があり、折れ曲がった書架のユニットを自由に組み合わせることで多様なコーナーを形成している。また、閲覧室や交流ストリート等、至る所に椅子・ベンチが置かれ、それらによって異なる表情を持ついろいろなゾーンを創り出しているため、利用者は各々自分の目的に適う場所を見つけることができる。

利用者との1対1の関係を

職員は館長を含め11名（うち司書9名）で、そのほとんどが二十歳代ということもあり、みな活き活きとしていて明るい印象を与えてくれる。それぞれが企画の段階から参加して書架の配置やデザインにも携わり、図書館を自らの手で作り上げている。館長は館の運営に当り「職員には一応規則を設けてはいるが自由にやらせている。むしろスタッフそれぞれの個性で利用者との1対1の関係をやって欲しい」と考えている。現に小さい町なので利用者の大半は顔見知りであり、身障者の方も把握して来館次第即対応することが可能だという。

イベントの積極的導入

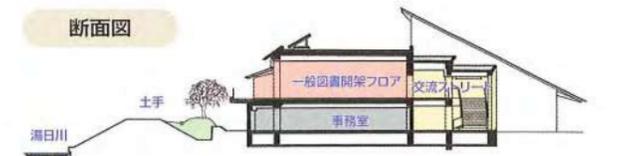
この図書館の活動の中で注目したいのが「交流ストリート」でのイベントである。ストリートは十分に幅があるので片側にテーブルを寄せることで公開アトリエに変貌する。閲覧室側には大きく湾曲した壁があり、反対の開口面は北側に面しているため一定の光環境のなかでの作業が可能だ。企画内容もユニークで公民館顔負けの興味をそそるものばかりだ。時に館長自らが科学

博物館へ足を運びテーマを探してくるといった熱の入れようである。このイベントは大変好評を博しており、参加者の間には世代や地縁を超えた新たな繋がりも生まれているようだ。

個人活動の場である図書館にイベントによる集団型の学習機能を持たせた点はこの図書館の特徴といってもよいだろう。こうした図書館は地域文化の活性化に繋がる中核施設として期待される所だが、このためには地域に密着した固有のサービスの絶えざる展開が必要であり、職員に求められる仕事は資料を扱うことのみにとどまらず、より幅広い知識とサービスの提供へと拡がることになる。しかし、見学を終え、いろいろとお話を伺った総合的な感想として、この図書館は、町民の生涯学習に対する熱い思いと職員の意欲に満ちた姿勢が相呼応しつつ、それを支える魅力的な建築空間に支えられて、これからわが国の地域図書館のひとつのモデルとして成長していくのではないかと、この期待を強く抱かせてくれた。

(岡田康継)

所在地	静岡県榛原郡吉田町片岡404
設計	(株)岡田新一設計事務所
延床面積	2,955m ²
図書収容力	開架95,000冊 閉架35,000冊



断面図



「うえの階」平面図



「したの階」平面図

0 5 10 15 20 25 30m

吉田町立図書館 交流ストリート活動記録

- 平成11年8月1日
- 2F 親子の展示コーナーにて
- 主催：吉田町立図書館
+ (株)岡田新一設計事務所

いろあそび
色と遊ぼう！

ひとくちに「赤」といっても、かぞえきれないほどの「赤」があります。
 「黄」「緑」「青」にも、たくさんの仲間がいます。
 集めてならべてみると、それがはっきりします。
 いらなくなった雑誌を使って、あなたの好きな「色」さがしをしてみませんか。
 ちなみに、右の4枚のコラージュ（はり絵）は、
 下にある、たった1冊の雑誌（黄の王国）からできています。どのページの、どの色が、どこに使われているか、比べてみてください。また、厚紙仕立てのものも、別の雑誌（マリ・クレール94年3月号）1冊から生まれたものです。
 カッターで切っても、はさみでも、また手でやぶいてもそれぞれに味ができます。のりは、しわにならないように、スティックタイプがおすすめです。ぜひ一度試してみてください。



吉田町立図書館 交流ストリート活動記録

- 平成11年8月8日
- 1F 喫茶コーナー前
- 主催：吉田町立図書館

はっばう
発泡スチロールの
ひこうき飛ばそう

アルソミトラ・マクロカルバのひみつ？

どうすれば とぶのかな ???

なぜ とぶのかな ???

この飛行機は、アルソミトラ・マクロカルバという東南アジアの植物の種子にヒントをえてこしらえました。風の力を利用して種を飛ばす植物があることや、種が風によって飛ぶ機子が観察できそうです。

みなさんもつくってみてはいかがでしょうか。

道具の作り方

発泡スチロールをうまく切る道具の作り方

用意するもの

板・・・10x20cmx厚さ1cm

螺ねじ・・・2本

ネジ・・・2本

ニクロム線・・・1本

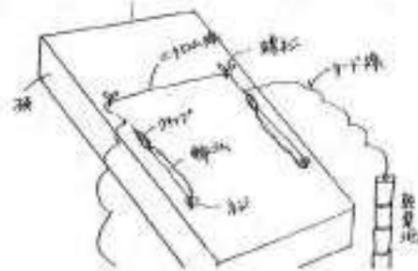
リード線・・・2本

乾電池単1号・・・4本

クリップ2個、輪ゴム

出来あがり図

〈乾電池を4個並列につなぐ。スチロールの厚さは螺ねじで調節〉



吉田町立図書館 交流ストリート活動記録

■ 平成11年11月28日

■ 1F 階段周辺

■ 主催：吉田町立図書館

+ボランティアワーク二葉会

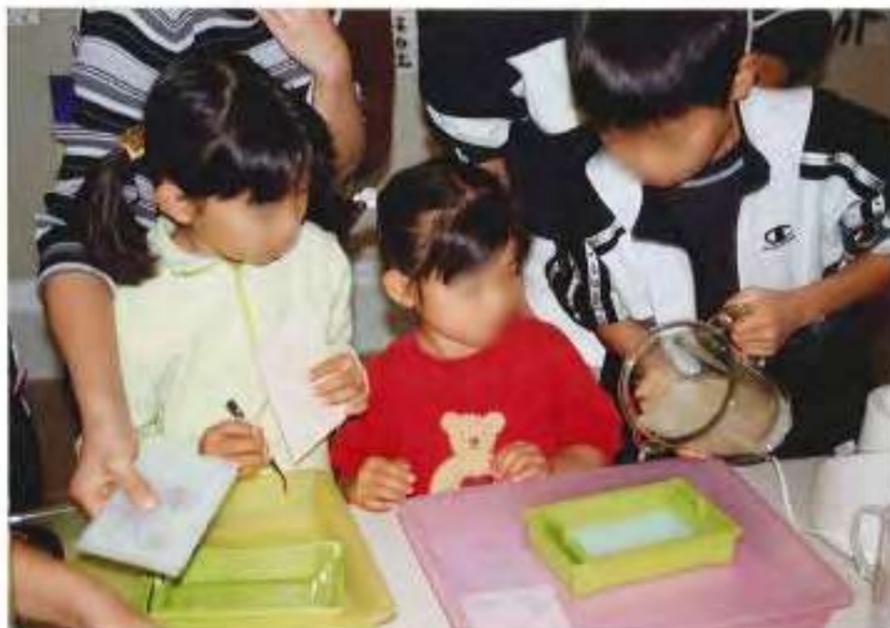
今話題のケナフを使って

紙すきで ハガキ作り体験をしませんか

ケナフのもつ、二酸化炭素を吸収し酸素を作る作用は、一般の広葉樹の4倍、アカマツの7.5倍あります。秋にはハイビスカスのような薄黄色の花が咲き、私たちの目を楽しませてくれる可憐な一年草です。ケナフはじり、濃度の高まりによる地球温暖化の防止につながると考えられています。そのケナフを使ってハガキ作りにチャレンジしてみませんか。



テレビなどマスコミに取り上げられることも多く、参加者も増えてきた。



事務室に隣接したワークルーム、職員用ばかりでなく、各種企画打合せや、このようなイベント時の説明会場としても活発に利用されている。



展示会その他の記録

吉川さん 吉田町片岡の町立図書館



自作のメッセージソングをギターで弾き語りする

車いすの歌手熱唱
吉川さんの自作の9曲に拍手
吉田

車いすのシンガー・ソングライター吉川英二さん(四四)富士市のコンサート(ポランテアワークニ)が十七日、吉田町片岡の町立図書館視聴覚ホールで開かれた。

吉川さんはギターの弾き語り自作の九曲を披露した。詰め掛けた町民ら百三十人は一曲ごとに盛大な拍手を送った。「私の旅」では参加者が吉川さんからその場で歌唱指導を受けた数

吉川さんは最後に子どもたちに向けて作ったという「太陽に向かって」を熱唱した。来場者は「生きる勇氣やあしたへの希望を写す」などと感じて話をしていた。



平成 11年 7・8月 1F:「図書館ができるまで」の紹介



平成 11年 11月 1F:「愛媛県吉田町(姉妹都市)児童生徒作品展」



平成 11年 7・8月 2F:「加古里子(かこさとし)原画展」



平成 11年 11月 2F「佐々木一成展」手足に不自由さを持つが、きめ細かい作品を手がけている

10月19日 静岡17面

トキの生態活写
「国際保護鳥トキ巡回写真展」が二十九日まで、吉田町片岡の町立図書館で開かれている。

新潟県佐渡島出身のフリージャーナリスト清水憲さん(六九)が昭和三十年代に撮影した半切のモノクロ写真十八点を展示している。佐渡島の海岸で撮影した環境庁のレッドデータブックの



「危急種」ハヤブサの写真も展示している。

トキが人里の田んぼを歩き、見物する住民の目の前でえさを採る姿や、ハヤブサの三羽のひなが巣立つまでの記録など、貴重な写真の数々に来場者は見入っていた。

トキの写真に見入る来場者ら 吉田町立図書館

10月19日 静岡17面



会員の活動成果が披露されている吉田町文化協会写真部の作品展=吉田町立図書館で

問い合わせは同図書館 電話0548(33)3434へ。

9月11日(土) 中22面

巧みな構図の21点
文化協 富士や大井川(ずりり) 吉田

吉田町文化協会写真部 一人二点ずつ出品。作品は(松本勝司部長の作品展が 由比町からの富士山、夜明十八日まで、同町片岡の町の火大会、尾瀬ヶ原、塩原温泉、アジサイ、ザクロなど多彩。旅情をそそぐ風景や季節の表情などが鮮やかな色彩と巧みな構図で写し出されている。

同展には部員二十一人が、泉、スイスのマッターホルン、アジサイ、ザクロなど多彩。旅情をそそぐ風景や季節の表情などが鮮やかな色彩と巧みな構図で写し出されている。

■平成11年7月開館後、
3年目から10年目までの記録



3年目(平成14年12月):パッチワーク作品展



「絵楽会」ワークショップのあと、
2週間にわたる展示作品の片付け。
これで、夏の長い1日も終わり—
—と思ったのが16:00頃
(右の写真)



子どもたちの絵が大勢の市民を楽しませてくれる。中でも私が気に入ったのは「みずのけんた君」の赤鬼だ。将来楽しみな子が同じ町に居てくれる。そう思えるだけで何か幸せな気分になる。図書館とは、このような出会いもあり、市民の日常に欠かせない場所になっている—



8年目(平成19年2月):幼稚園合同展示会

そこに突然現れ、展示を始めたのが吉田高校書道部の女子高生たち(下写真2枚)
男手は先生と助手1名
2時間ほどで、1、2階あわせて40mの展示壁を埋め尽くした、その手際よさは見事
校内よりも図書館で展示した方が大勢の人に見てもらえるので張り合いがあるとの声しきり。毎年夏休み最終週が恒例になってきたとのこと



図書館は単なる本の倉庫ではない。探しやすいように分類され並んでいる。それを宝探し感覚で、実体験するワークショップ。義務教育で分類学を学ぶ機会がなかった今の大人たちも、真剣に耳を傾けていたのが印象的だった



4年目(平成15年8月24日):絵楽会展示最終日ワークショップ



4年目(平成15年8月24日):吉田高校書道部作品展・展示作業風景



10年目(平成21年8月):10周年記念ワークショップ
図書館+設計事務所共催「図書館の本さがそう(お題:さかな)」

(仮称) 藤代町立中央図書館 建築現場見学会記録

■ 日時：02/02/23 (土) 第1回10:15+第2回11:15

■ 主催：藤代町教育委員会 協力：岡田新一設計事務所+大林組

テーマ：建築もみんなで助けあっている

『完成したら見えなくなってしまう「力持ち」たち』

- 1) 図書館と建築のおはなし
- 2) 現場見学・体験

説明担当：岡田新一設計事務所
実行担当：大林組+職人さん

4本の柱だけの2階、
少し揺れただけで倒れてしまう。



4本の柱が手をとるように梁(はり)でつなぐ。
かなり揺らしても壊れなくなる。



その梁にはH鋼と呼ばれる強い鉄骨が使われている。Hではなく、エの向きの方が、上からの力に対して丈夫に働く。
(現場でそれを確認)



鉄筋のように、細い素材をタテヨコ(格子)に組んで力が強くなるものには他にないがあるだろうか？



鉄筋の結束を職人さんから学ぶ。はじめは恐る恐る...



図面と本物を見比べる。玄関などの場所を確認する。



鉄骨や鉄筋などが組み立てられていく様子を見る。



働く車(バックホー)を目の前で見る。大きさと音に皆釘付け状態。



直前まで働いていた車に乗ってみる。



藤代町図書館準備室から、子どもたちへの野外レファレンスで閉め。

(仮称) 藤代町立中央図書館 建築現場見学会記録

- 日時：02/02/23 (土) 第1回 10:15+第2回 11:15
- 主催：藤代町教育委員会 協力：岡田新一設計事務所+大林組

＜小学生対象＞ 約 40 名参加 第 1 回 (小学校高学年)
 第 2 回 (小学校低学年+幼稚園児)

1) 図書館と建築のおはなし 説明担当：岡田新一設計事務所
 2) 現場見学・体験 実行担当：大林組+職人さん
 ※ 全体の誘導・指揮 担当：藤代町図書館準備室

テーマ：建築もみんなで助けあっている

『完成したら見えなくなってしまう「力持ち」たち』

1) おはなし (10分)

- ・ (前段) 図書館にはいろいろな種類のたくさんの本と、本のことなら何でも教えてくれるライブラリアンがいる。
- ・ 今度の図書館の児童開架フロアは 2 階にある。建築の 2 階はどのように支えられているのだろう？
 まず、柱。だけど柱だけでは、ゆれたらつぶれる。
 ↓
 そこで、柱をつなぐ。それは梁（桁）と呼ばれている。みんなで手をつなぐようにして地震に耐えている。
- ・ その梁には H 鋼と呼ばれる強い鉄骨が使われていて、ちょうど組みあがった状態を見ることができる。H ではなく、エの向きの方が、上からの力に対して丈夫に働く。(そうになっているか、現場で良く見てみよう)
- ・ そして床。今度の図書館の床は、鉄筋コンクリートでできている。

コンクリートのなかに鉄筋が入っている。コンクリートを流し込んだら鉄筋は見えなくなってしまう。コンクリートと鉄筋はどのようにして助けあっているのだろう？

まずは、コンクリート。

- ① 自由な形になる (テストピースは、プリンやゼリーと同じ)
- ② 押えられる力 (圧縮力) に対してはとても強い。
- ③ しかし、引っ張られる力には弱い。

→ (簡単なモデル 1)

→ (簡単なモデル 2)

→ (簡単なモデル 3)

→ テストピースを見せる (現場で用意)

→ スタイロフォームをコンクリートに見立てて割ってみせる。(=引っ張られる側から割れる)

鉄筋は、反対に

- ① 引っ張られる力にはとても強い。
 - ② 逆に押さえつけられる力には減法弱い。
- このように、コンクリートと鉄筋は逆の長所が多く、助けあって強い力を発揮する。(おとうさんとおかあさんとおなじ?)

- ・ 鉄筋も 1 本では力が出ない。大勢の仲間たちと肩を組んでいるように、コンクリートのなかでバランスよく並んでいなければならない。そうなるように、職人さんたちは特に気をつけて工事をする。とにかくコンクリートを流し込んだ後では手直しができないのだから。
- ・ 鉄筋のように、細い素材をタテヨコ (格子) に組んで力が強くなるものには他になにがあるだろう？
 - 竹籠 (何か用意)、グレーチング蓋 (本物を 1 枚みせる)、セーターも原理はおなじこと。
 今度、身の回りを注意深く観察してみよう。
- ・ 図書館の現場も、大勢の人々のちからで支えあい、みんなの図書館が少しでもすばらしいものになるように頑張っている。

2) 現場見学・体験 (約 30分)

① 鉄筋の結束を身近でみる (高学年のみ)。

- ・ 鉄筋に触れてみる。
- ・ 職人さんに結束 (タテヨコの交点を緊結) してもらう。(1×6m程度の餅網用意。ばらけないようにしておく)
- ・ 希望者には、実際に体験してもらう。

② 現場をみる。

- ・ 全体の構成 (どこが入口か、児童開架フロアはどこにあるか等)
- ・ 鉄骨が柱と梁でつながっている様子。
- ・ 鉄筋が餅網のように、あるいは籠のように加工されている様子。
- ・ パースと本物の大きさの違いを体感する。
- ・ その他

③ 働く車に乗ってみる。

- ・ ユンボ (バックホー) を目の前で動かす。
- ・ いま働いていたユンボの運転席に順番に乗ってみる。

→ ピアノ線を引っ張ってみせる。細くても切れない。逆に押し付ければ、簡単に曲がってしまう

→ 竹籠をみせる

→ グレーチング (現場で用意) をみせる

→ 現場で用意。

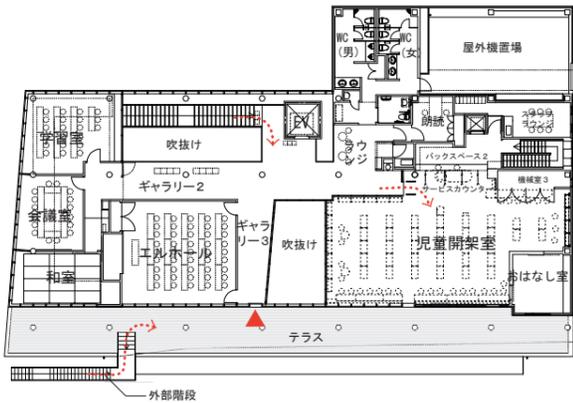
→ パネル張りパースは部屋に用意しておく。

→ 現場で用意。

あきる野市東部図書館エル

あきる野市野辺字下田39-27
 敷地面積 : 1,721.14㎡
 建築面積 : 920.08㎡
 延べ面積 : 1,375.22㎡ (1階822.89階㎡ / 2階552.33㎡)
 階数 : 地上2階
 最高高さ : 9.86m
 構造 : 鉄骨造
 蔵書可能冊数 : 開架 75,000冊 (一般 : 59,000冊 ・ 児童 : 16,000冊)
 開架 約15,000冊
 開館 : 2005年8月
 設計 : (株)岡田新一設計事務所

身近な図書館・生活施設として：
 敷地周辺は閑静な住宅地で、ほとんどの建物には屋根がある。よって、四角いビルではなく、おおらかなスカイラインをもつ佇まいがふさわしい。その大きな屋根の下の空間は、緩やかな曲線の天井、ガラス間仕切壁、吹抜けにより、各ゾーンを視覚的につなげている。親しみやすさとともに、集う人々の学ぶ気持ちに応援する雰囲気づくりに配慮した。



2階平面図 S=1:500



北側外観(エントランス)



前田公園より南側外観をみる

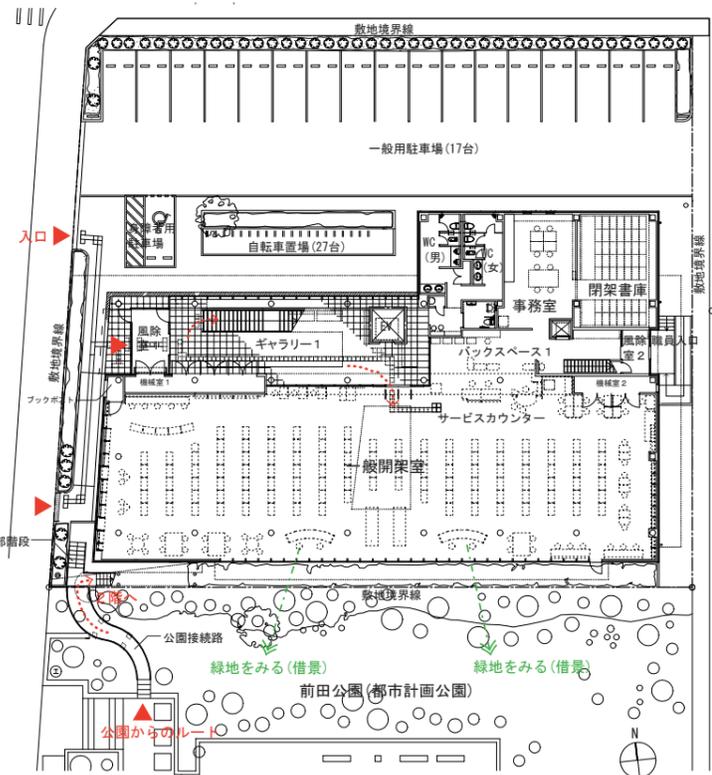


南側外観夜景



敷地南側境界(前田公園を借景とする)

建築を南側公園に寄せた配置計画：
 敷地北側は駐車場とし、近隣への日影を最小限に抑えている。南側は前田公園(史跡指定)との一体的な活用を図っている。公園接続路、外部階段により、公園から直接2階テラスへ上がり下りできる。また、1階一般開架室の南側を大きな開口とし、公園の緑豊かな環境を借景としている。サッシ中間部の水平庇に反射した自然光は、アクリルルーバーにより拡散され、天井に映り込み、やわらかな雰囲気を高めている。



1階平面図 S=1:500



1階一般開架室(前田公園の緑がみえる)



2階児童開架室



2階児童開架室(サービスカウンター周辺)



開架室入口より公園側をみる



一般開架室(サービスカウンター周辺)

一般、児童開架のレイアウトは、中置書架が一行にまとまって並ぶ構成となっている。このレイアウトは、書架側板見出しが一行に並んで見えるメイン動線と、直交する書架間サブ動線の組み合わせが明快であり、全体の構成を把握しやすくする。また公園の緑地に対して視線が通り、森の図書館の雰囲気をかもし出す。

開架室内の吹抜けは採光、換気機能だけでなく、2階の児童開架室およびギャラリー3との視覚的な連続性を高める。ガラス面は全て飛散防止フィルム(グラデーション印刷)を張り、透明性と不透明性を共存させている。また、開架室、ギャラリーの空調は、床輻射冷暖房方式を採用。一般の天井吹出方式と比べ、静かで、吹出し風(ドラフト)を感じることもなく、快適な居住環境となっている。



1、2階のオープンスペースは各ゾーンを結ぶだけでなく、市民活動の発表の場として、展示などが行える。



また、2階の諸室、ギャラリースペースは、開架室の扉を閉めることにより、時間外での利用も可能。

1、2階ギャラリー

あきる野市中央図書館

住 所 : あきる野市秋川一丁目16-2
 敷地面積 : 2,260.73㎡
 建築面積 : 1,691.62㎡
 延べ面積 : 3477.54㎡
 階 数 : 地下1階、地上3階
 構 造 : 鉄筋コンクリート造
 収容可能点数 : DVD 約4,500点
 児童開架室 約30,900点
 一般開架室 約114,700点
 児童書庫 約12,500点
 閉架書庫 約234,000点

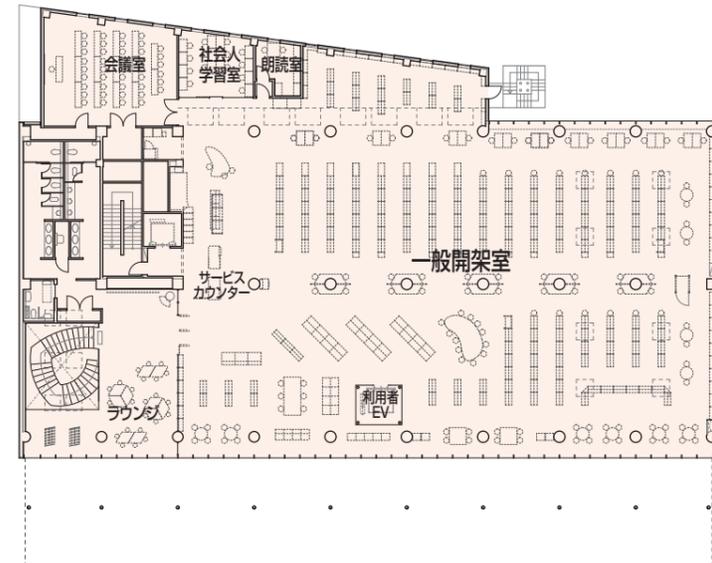
開 館 : 2007年8月
 設 計 : (株)岡田新一設計事務所
 施 工 : 村本・クリエートJV(建築)
 八重洲・坂本JV(機械設備)
 中立・澤田JV(電気設備)
 くろかね工作所・日本ファイリング(家具)
 田嶋土建(外構)



- 1: 外観夜景
- 2: 螺旋階段
- 3: 一般開架室(1)
- 4: 一般開架室(2)
- 5: 児童開架室
- 6: 西側外観

2階ワンフロアの一般開架室は、側板見出しが一列に並ぶメイン動線に各書架間のサブ動線が垂直に交わる構成で明快なので、利用者が容易に全体を把握することができる。また、地域、ビジネスコーナー、学習室、朗読室などの必要諸機能を東側の張出したボリュームにまとめ、レファレンスサービスの効率化を図った。可能な限り多くの外壁面をカーテンウォールとし、トップライトからも光を取り入れることにより、奥行きのある開架室を明るく開放的なものとした。

あきる野市中央図書館は、駅前中心市街地の人の流れを踏まえ、駅方向から広場越しに内部の活気が読み取れる構成を提案しました。この駅前地区はヨーロッパの街並みを共通イメージとしているので、既存キララホールとともに広場を囲む配置とし、ホールの回廊と軒高をそろえた大きな庇をガラスカーテンウォール前面に設置しました。さらに、スカイラインの形状にも関連性を持たせ、外壁タイルは同系色としつつ、重厚な既存ホールに対し、やや明るく艶のある表情として街に彩りを添えています。

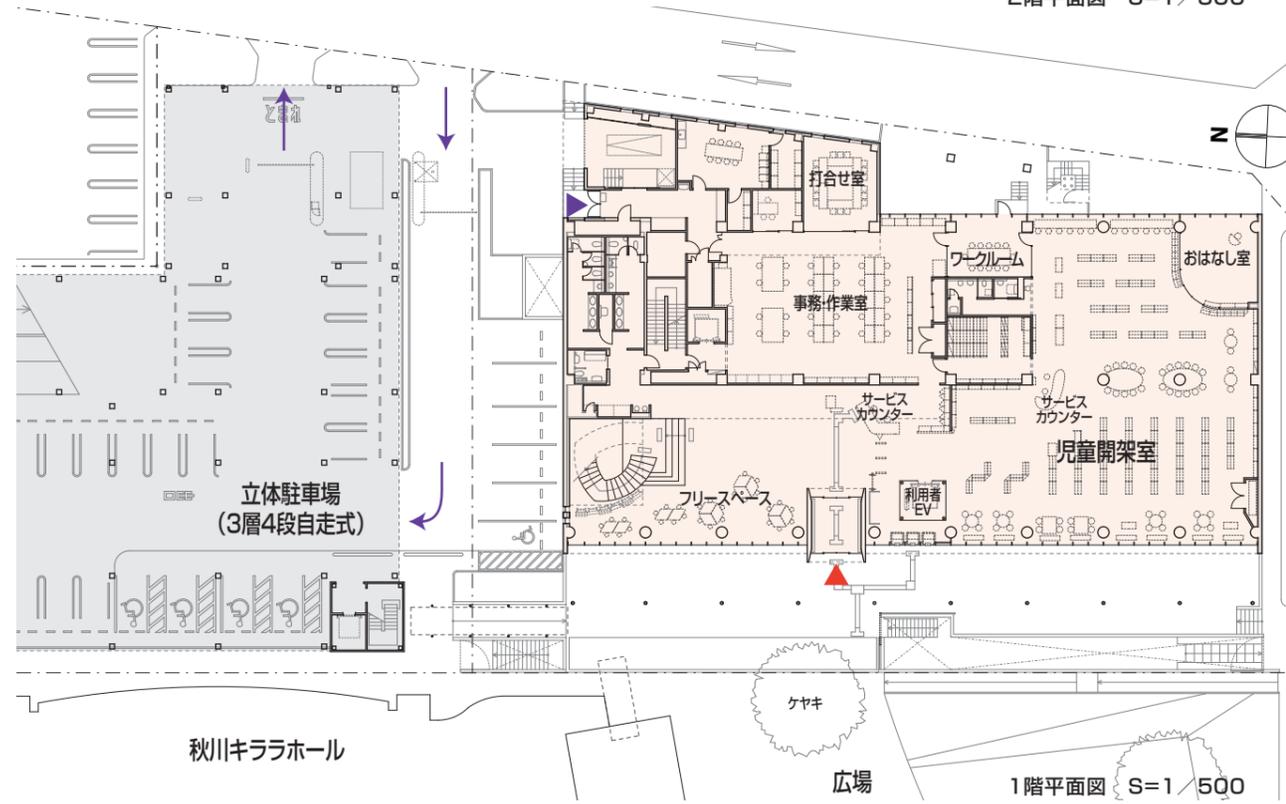


2階平面図 S=1/500



1階南側の児童開架室は中央柱の楕円テーブルを境に低学年と高学年を緩やかにゾーニングしている。広場側の(高学年)書架は開口に対して垂直に配置することで、広場に対する視線の通りを確保し、東側の(低学年)書架は管理の目が行き届くように配慮しつつ、中通路をずらすことで書架並びに遊び心を持たせる構成とした。書架の側板には地元産の無垢(ヒノキ)材を採用し、特徴あるインテリアを作り出している。

管理区域(ICゲート)の外側にあるフリースペース(1階)、ラウンジ(2階)は、市民が気軽に利用できる交流スペースと位置付け、フレキシブルなレイアウトが可能なテーブルや展示用の家具などしつらえを工夫している。



1階平面図 S=1/500

